

第8回 石岡市文化財調査報告会 発表要旨

石岡市染谷八坂神社の祇園祭 神輿が恋瀬川に下りる！！	近江礼子	2
白久台遺跡の圧痕レプリカ調査及び土器製作への展望 西本志保子・金子悠人・奈良部大樹・佐々木由香		10
東大橋原遺跡出土土器の再整理に向けて	金子悠人	14
「舟塚山型」円墳	谷仲俊雄	18
水戸藩領井関村の人別証拠	竹内智晴	24

2025

石岡市教育委員会

例 言

1. 本書は、2025（令和7）年2月1日（土）に開催する「第8回石岡市文化財調査報告会」（主催：石岡市教育委員会）の発表要旨です。
2. 本書の執筆は各報告者が行いました。編集は石岡市教育委員会 文化振興課が行いました。
3. 報告会の開催にあたり、下記の方々からのご協力とご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。

石 崎 雅比古

大 野 幸 枝

篠 田 文 雄

富 田 道 代

長谷川 則 子

比 氣 貞 夫

常陸國總社宮

第8回 石岡市文化財調査報告会 プログラム

開催日 2025（令和7）年2月1日

会場 八郷総合支所 101～103 会議室

- | | | |
|-------|--|------|
| 13:00 | 石岡市染谷八坂神社の祇園祭
神輿が恋瀬川に下りる！！ | 近江礼子 |
| 13:40 | 白久台遺跡の圧痕レプリカ調査及び土器製作への展望
西本志保子・金子悠人・奈良部大樹・佐々木由香 | |
| 14:20 | 東大橋原遺跡出土土器の再整理に向けて | 金子悠人 |
| 15:15 | 「舟塚山型」円墳 | 谷仲俊雄 |
| 15:55 | 水戸藩領井関村の人別証拠 | 竹内智晴 |

近江礼子

令和6年7月13日(土)・14日(日)、恋瀬川を南に見下ろす石岡市染谷そめや鹿島神社において、境内社八坂神社の祇園祭が執行された。この祭は神輿を担いで恋瀬川に下りる、通称「お浜降り」をするのを特徴とする。また、子供会の幌獅子に子供たちが乗って囃し、子供獅子を舞うのも特徴である。祭では区内安全と五穀豊穡が願われる。

令和2年・同3年はコロナのため中止され、神事のみが行われた。

一 染谷の概要

1 染谷の位置と歴史

染谷は石岡市南東部、恋瀬川左岸に位置し、対岸はかすみがうら市下志筑・中志筑である。東部を南北に常磐自動車道が通り、西北部には「常陸風土記の丘」が広がる。

「常陸志料郡郷考」によれば、染谷村は昔は村上村の内にて、染屋職の人が多く住んでいたのが染屋と表記したが、いつの頃からか染谷と書き替えられたという¹。『新編常陸国誌』²にも、染屋は村上村の南にあり、小名(小字)を東前・中之坪・西之坪・新地・池袋といったとある。元禄年間(1688~1704)迄は府中領で、同15年の石高は997石余であった。後に旗本皆川氏の知行所となり、廃藩置県に至った。明治元年(1868)の石高は1164石余の大きな村で、同22年に石岡町に合併された³。

2 染谷の神社・仏閣

佐志能神社 染谷の北部、竜神山南麓に建ち(染谷1856)、豊城入彦命と高龍神の2神を祀る。俗に陰龍神といい、延喜式内郷社に列せられた有名な神社と伝わる⁴。旧郷社で、竜神様と呼ばれる。例年4月19日に祭典を執行し、石岡市指定有形民俗文化財の里神楽「染谷十二座神楽」⁵が奉納される。

鹿島神社 恋瀬川を南に見下ろす高台(染谷1017)に位置し、西に筑波山を望む。武甕槌命を祀り、旧村社で、現在は10月15日を例祭日とする。南面する本殿は流造り方一間、拝殿は間口四間、奥行二間である。

社殿左側には奥から稲荷神社の小社、その手前の大きな覆屋の中に右に清心神社、左に八坂神社の小社が東面

して建つ(写真1・2)。さらに、稲荷神社の奥には明治期建立と考えられる「御嶽山國狭槌尊」「八海真國狭槌尊」「三笠山豊斟淳尊」「大己貴命」「金山彦命」「猿田彦命」「那智山國狭槌尊」等の自然石形碑が9基並ぶ⁶。『茨城県神社誌』⁷には、明治41年7月にきひ気比神社⁸も合祀されたとある。主な境内社は次の通りである

・**稲荷神社** 倉稲魂命を祀り、初午と11月15日に集落全体で祭をしていたが、平成期には個人的に祀るのみとなった。小社の右側面にぼた餅を奉納した古いワラット(藁包)が7、8個下がる。

・**八坂神社** 祭神は素盞鳴尊、当初は陰暦6月13日を例祭日としていた。そして、昭和50年代には子供が夏休みに入る直前に祇園祭を執行した。現在は海の日前の土・日曜日の2日間に祇園祭を執行する。霞ヶ浦沿岸部周辺の八坂神社では、川や湖の岸に流れ着いた天王様を拾って祀った例が多いが、染谷ではその由緒は不明である。

地区の中央を南から北に入る谷津に天王谷津とあるので、旧在地近くと考えられる。

・**清心神社** 聞き慣れない神社名で、『茨城県神社誌』⁹によると、鹿島神社境内社として一社だけ「清心神社(素戔鳴命)」とある。そして、明治41年1月に鹿島神社に稲荷神社、巖島神社と共に合祀されたとある。染谷の人々は今回の祭を「八坂神社の祇園祭」と認識しているが、宮司を兼務する常陸國總社宮では、「清心神社の例大祭」と捉え、口上や御札にも「清心神社」とある。

染谷では佐志能神社、八坂神社、鹿島神社と年3回、各当番が輪番で祭を行なう。

宝持院 鹿島神社参道から向かって左側(鹿島神社社殿右下)は真言宗豊山派の宝持院¹⁰(金剛山密巖寺、本尊聖観音 染谷986)となっており、墓地が広がる(写真3)。江戸時代は鹿島神社の別当と推察できる。

3 染谷の組織

染谷183戸(令和6年7月現在)は表1のように12坪に分かれるが、池袋坪は少なくとも明治時代、100年以上前から、祭に参加していない。そのため祭は11坪が5組に分かれ、毎年輪番で当番を務める。今年の当番は田島坪18戸と南坪13戸の計31戸で、田島坪を本当番という。南坪を相町あいちょうと呼び、祭に協力してもらう。5年後は

南坪が本当番となり、相町の田島坪は南坪に協力する。中ノ坪に相町はなく、滝場坪と峠坪は当番を受けず、御札のみを迎えている。

表1 染谷の坪名・戸数・相町・氏子数

組・坪名	戸数	相町	氏子数
1 田島坪	18	南坪	18
1 南坪	13	田島坪	13
2 高根川坪	12	東前坪	10
2 東前坪	11	高根川坪	9
3 中ノ坪	15	なし	15
3 滝場坪	21	当番×	21
4 西坪	16	北浦坪	16
4 北浦坪	13	西坪	13
5 新地西坪	19	向坪	19
5 向坪	17	新地西坪	15
5 峠坪	10	当番×	10
※ 池袋坪	18	祭に不参加	なし
合計	183		157

染谷自治会の区長は比氣貞夫氏が務め、他に会計が1名いる。そして、各坪に協力員が1名ずつの計12名がいて、自治会役員は総勢14名である。区長は前区長の推薦による場合が多く、任期は特に決まっていない。

区長の比氣氏は神社総代長を兼任、責任総代は比氣氏を含め3名、その他に池袋坪を除き各坪に神社総代が各1名の計11名いて、神社役員の総数は14名、任期は3年である。9月の常陸國總社宮例大祭の講社祭には、染谷講25名の代表として責任総代など3名が列席している。

二 例大祭の準備

当番の田島坪18名は祭礼当日の13日午前6時、染谷農村集落センター（以下、センターと略す）に集合し準備をした。

1 オカリヤ建て

オカリヤ（御仮屋）とは祭の時に神輿が休む御旅所である。40年位前（昭和60年頃か）は、祇園祭のトウケ（当）の庭に小さなオカリヤ（約1.5間四方）を建てていたが、それ以降はセンターの左庭に間口約2間弱・奥行約3間・高さ約2間半の大きなオカリヤを毎年建てる。以前のオカリヤは全て木造であったが、現在は土台部分等に鉄骨が使用されている。集落内の長谷川工務店に作ってもらい、当番が自前で組み立て、自前で解体する。部材の保管場所はセンター左奥に併設された倉庫で

ある。

神輿が恋瀬川に下りる場所から青茅を刈り取り、オカリヤ屋根正面全体に垂らす。青茅は邪鬼を祓う、穢れを避けるといわれる。そして、正面上部に看板「八坂神社祇園祭 令和6年7月13日（土）14日（日） 当番 田島坪」を掲げる。正面に昭和55年7月氏子奉納の白の三巴紋が入った紫の水引幕、左右側面と背面に紅白の幕を張る。床に奠座を敷き、正面手前に賽銭箱を安置する。また、オカリヤ右横にテントを張り、テーブルとパイプ椅子を並べる。

2 幟立て

鹿島神社参道の入口に大幟一對を立てる。右に「頭頭むらくものつるぎ 叢雲 劍 吳（吳）碩 櫻井幸四郎謹書 印 印 氏子中」、左に「赫赫かくかく 素尊¹²勲 平成十二年七月二十日 氏子中」と墨書がある。

3 注連縄

参道入口の幟と文政2年（1819）2月の第一の鳥居¹³との間の両側に高い竹を立て、紙垂を垂らした注連縄を高く張る。参道階段上の天保14年（1843）8月の第二の鳥居¹⁴にも同様に注連縄を張り、鹿島神社・八坂神社・清心神社にも注連縄を張る。

4 地口行灯・提灯・ポスター

当番である田島坪の当番長宅・トウケ（当）・センター入口三叉路の3ヶ所じくちあんどんに、地口行灯「御祭礼 八坂神社」「五穀豊穰」（共に朱書、絵なし）、「当番 田島坪」（墨書）を飾る。トウケには丸提灯「御祭礼」を掲げる。数や場所は当番坪により異なる。

お浜降りの写真が入ったポスター「八坂神社祭礼 令和六年七月十三日（土）神幸祭 式典開始 午後三時 十四日（日）例大祭 式典開始 午前十時 当番 田島坪」（A2判大、新聞紙1頁大）を作る。7月に入ってから、センター玄関とセンター駐車場脇三叉路の電信柱に張られた。

5 神輿

鹿島神社境内の神輿倉庫に保管されている神輿は、13日朝に社殿前のウマ（馬、脚立、神輿台）に安置され、飾り付けられた。この神輿は昭和57年に新調された¹⁵。今年の祭は例年より1週間早いので、天頂の鳳凰が銜える稲穂の確保に苦勞し、知人の伝手を頼って行方市麻生の早場米農家から譲って貰った。少子高齢化による神輿担ぎ手負担軽減のため、台車が今年新調されたが、渡御中は使用せずに済んだ。

6 幌獅子

子供会の幌獅子^{ほろじしし}は、センター前の空地で組み立てられた。幌獅子正面上部に大御札「清心神社祈禱神璽」「区内安全 染谷子供会殿」(約54×11.5cm)を掲げ、櫛も添えられた。その左右には小田原型提灯「染谷子供会」が4灯ずつ計8灯並んだ。幌獅子は平成14年5月製作の子供会用の小さな獅子頭(幅約50×奥行約41×高さ約45cm 重さ約5kg)で、長さ約5mの幌は紺と黄土色の太いストライプ模様である。獅子の背中には多数の白い小さな鬃^{たてがみ}が付いている。幌獅子上部周囲には紙垂の付いた注連縄が張り廻らされた。以前、青年会が幌獅子を担当していた時は昭和49年7月作の大きな獅子(65×55×56cm 約10kg)¹⁶だった。その前にはもっと古い獅子頭を使っていた。

小獅子頭が出来た平成14年頃、お浜降りするまでは大獅子頭で、地区内を渡御する時は重いので小獅子頭に取り替えていた。しかし、ここ20年以上は子供も持って舞える小獅子頭のみの出番である。

屋台中央下部にゴムタイヤが左右1輪ずつあり、前後には小さめの補助タイヤ4輪が付いている。屋台は鹿島神社の倉庫に保管されている。

大小太鼓を担当する小学生の男子6名は、6月から毎週土曜日午後6時半からセンターで練習した。どの子も耳に馴染んでいるので直ぐ覚え、大変上手である。6名は幌獅子の屋台に乗り、渡御中休みなく大小太鼓で「さんざり」などを交代で叩いた。

子供会やその親は、両衿に「染谷子供会」と白で染め抜かれた水色(子供)や紺色(大人)の祭半纏を着た。背中には赤字で大きく「祭」とある。

7 猿田彦と巫女

渡御列の道案内をするのは猿田彦で、当番坪のトウケが兜^{かぶと}を被り、衣装を着て、薙刀^{なぎなた}を持つ。40年前迄はトウケにオカリヤが建ち、直会^{なおらい}もトウケで開かれた。今は猿田彦を務め、家に地口行灯・丸提灯が掲げられるだけである。

巫女は当番坪の女子が務めるがいないので、当番坪の小学2年生の8才女子と幼稚園年長の6才男子の姉弟だった。毎年巫女の着付を担当する人と母親で巫女に化粧し、衣装を着せた。特に冠が落ちないように着付けるのが難しいという。昔から舞は踊らなかった。

8 神輿担ぎ

当番坪を中心に、白丁上下に白や黒の地下足袋を履い

た担ぎ手は約15名(総勢約35名)であった。当番坪だけではとても足りず、染谷総動員に近いという。

三 例大祭

○1日目(9月13日) - 神幸祭

1 発輿式

13日午後3時から、常陸國總社宮宮司と権禰宜により鹿島神社社殿前で発輿式が執行された。正面には高さ約60cmのウマに安置された神輿、その前の祭壇は竹4本と注連縄で囲まれ、祭壇上には神酒・重ね餅・塩・水をはじめリンゴ・大根・人参、昆布・するめ等が供えられた。神輿の右脇には新調された立法形の台車、向かって祭壇右側に神社総代等の役員、同左側に猿田彦・巫女・神輿担ぎ手が並んだ。宮司は祭壇右前、権禰宜は同左前に位置した。左側に位置する大太鼓に続いて、権禰宜が「清心神社の発輿式を執り行います」と発声、次のように式が執行された(写真4)。

- 一 修祓 神輿、台車、祭壇正面、宮司、右の役員、左の供奉者。
- 一 宮司一拝
- 一 献饌
- 一 祝詞奏上
- 一 玉串奉奠 雅楽のテープが流れ、宮司、区長(神社総代長)、副区長(役員一同列拝)、当番長(神輿供奉者列拝)、子供会代表(子供会列拝)の順に玉串を捧げた。
- 一 撤饌
- 一 宮司一拝

太鼓が叩かれ、一同神酒を拝戴した。

2 神輿渡御

午後3時12分、神輿部長の「肩を入れて一」の掛声で神輿が白丁姿の15名により担がれた。渡御列は触太鼓・猿田彦、権禰宜、巫女2名、神輿、宮司、役員の順で、鹿島神社参道の険しく狭い階段を注意深く下りた。15名に担がれた神輿は第一の鳥居手前でウマに載せられ、神輿の横担ぎ棒が2本付けられた。

「肩を入れて一」の掛声で17、8名の担ぎ手が神輿を担ぎ、「わっしょい、わっしょい」「わっせ、わっせ」と勇ましく揉み、渡御が始まった。そして、参道前で待機していた25名前後の子供や母親に曳かれ、約10名の父親たちに守られた幌獅子が続いた(写真5)。男性が獅子

頭を大きく力強く舞ったが、途中で小学高学年男子による上手な獅子舞も見られた。

一行は神社参道入口前の道を左（南）へ進み、青々とした水田脇に沿って西に進み、恋瀬川の土手を上り南東に進み、土手を下りお浜降りの場所に来た。この場所の小字は神田、通称カワヅラ（川面）、アライバ（洗い場）と呼ばれる。

3 お浜降り

神輿は川べりでウマに載せられ、大太鼓が響き、大勢の観客が見守る中、修祓、祝詞奏上、神酒拝戴の神事が執行された。午後3時32分、四方の金飾り（^{ようちやく}璽瑠）が外された神輿はゆっくりと厳かに川の中へ進んだ。下部が水に漬かると周囲から川水が掛けられ、揉まれ、回転し、約3分間お浜降りをした（写真6・7）。この場所は御神体が流れ着いた場所と推察できる。

昔は神輿が川に流されたこともあり、また川から中々上がって来なかったこともあった。あまり水に漬かると神輿が重くなるので、最近はこのくらいの時間（約3分）である。20年前位の田島坪が当番の時、矢場公園の近くまで神輿が渡御、お浜降りと称し、バケツで汲んだ川の水を神輿にぶっ掛けたという。

4 渡御コース

一行は前方と後方の警戒車の間で、元のように行列を組んで、元の道に戻った。青々とした田の脇を進む供奉行列は美しい風景であった。鹿島神社参道入口を通り過ぎ北へ進み、四差路右奥の石岡市消防団第5分団車庫前で休憩となった。冷たい飲み物が配られ、一息ついた。途中では、高齢女性たちが通りにベンチを出して座って拍手で一行を迎えた。太鼓の音に玄関から出てくる人も多かった。供奉に追従するカメラマンや観客も多く、総勢百名に近かった。

約15分の休憩の後、午後4時14分、渡御列は車庫脇の堂地坂を上り東に向かった（写真8）。センターの駐車場を左折、北に向かい田島坪に入った。天保5年（1834）の光明真言塔が立つ四差路を右折、個人宅で揉まれ、同30分に長谷川工務店駐車場に着き休憩となった。当番の田島坪はセンターに近いので、今年は特別に地区内を渡御したのである。同45分、神輿は駐車場を出発、オカリヤに向かった。しかし、途中の四差路や三差路に入り込み、役員たちが慌てて呼び戻す場面もあった。昔は酔っ払い神輿なので荒々しく、コースを外れあちこちに入り込んだという。

幌獅子を曳く約25名の子供や母親たちは、大きな声で元気に「そーめや、それぞれ、世界で一番いい所」、「そーめや、それぞれ、いい所」などと元気に囃し立てた。

コロナのために3年ぶりの渡御となった令和4年、担ぎ手はマスクをして神輿を担ぎ、お浜降りの後、直ぐに鹿島神社へ戻り例祭が執行された。幌獅子も中止となり、大声も出せず、さみしい祭であったという。

幌獅子はオカリヤ前の空地で神輿を待ち、お互いの健闘を称え合い神輿と幌獅子の頭合せがあった（写真9）。以前は小さい子供が多く、獅子頭に頭を噛んでもらう光景が多く見られた。獅子は邪鬼を食べてくれるので、頭が良くなる、丈夫に育つといわれた。

5 神輿鎮座祭

午後5時前に神輿はセンターに到着、オカリヤ前に安置された。太鼓が響き、鎮座祭が始まった。修祓、祝詞奏上、玉串奉奠、神酒拝戴と続いた。

横担ぎ棒が外されオカリヤに遷された神輿（写真10）は、翌々日の15日朝迄ここに安置されるが、夜の見張り・泊りはない。最後に無事の鎮座を祝し、当番長の挨拶と三本締めがあった。

その後、幌獅子がオカリヤ前に移動、皆が見守る中で青年が勇壮な獅子舞を奉納した。そして、幌と獅子が外され、屋台は鹿島神社倉庫に戻された。

6 矢場公園への魚取り

鎮座祭終了後、12名の子供たちはセンターから青い魚取り網を持ち、喜び勇んで1km弱離れた矢場公園へ向かった。母親4名に付き添われ、仲良く魚取りを楽しんだ。メダカ・フナ・蛙を捕まえては放し、キャッチ&リリースであった。子供たちにとって、祭恒例の楽しみとなっているという。

○2日目（9月14日） - 例大祭

当番の田島坪18名は午前7時にセンターに集合。テントをオカリヤ前に移動、パイプ椅子29脚を並べた。同時刻に直会の準備をする当番田島坪の女性たち7名もセンター調理場に集まった。

9時半過ぎ頃から各坪の神社総代と協力員が、ワイシャツにネクタイ姿で、神輿担ぎ手が昨日使用した白丁上下と初穂料を持ってセンターに集まって来た。

1 例大祭

午前9時55分に太鼓が響き、24名が着席、当番等12名は立席で例大祭が始まった（写真11）。

修祓、祓詞奏上、宮司一拝、献饌、祝詞奏上、玉串奉奠、撤饌、宮司一拝と続いた。玉串奉奠は宮司に続いて、神社総代長から着席の24名が順に玉串を捧げた。最後は当番長の玉串奉奠に合わせ、立席の当番等が二拝二拍一拝した。太鼓が響き、全員が神酒を拝戴し、恙なく例大祭が済んだ。

2 直会

センターのホールにて、午前10時38分から約40名による直会が次のように開かれた。

- 一 神社総代長挨拶
- 一 總社宮宮司挨拶
- 一 当番長による乾杯

神社総代長は謝辞に続き、来年当番の高根川坪と東前坪は人数が少ないため、中ノ坪も加わって祭を執行したい旨、10月には鹿島神社の例大祭もあるので、御協力を願いたい旨の挨拶をした(写真12)。乾杯の後、来賓の挨拶もあった。当番から各坪毎に封筒に入った御札が配られた。

直会の献立は天婦羅とうどんが定番で、他は当番の才料に任されている。今年为天婦羅は玉ねぎ・紫蘇・人参のかき揚げ、さつまいも、紫蘇、茄子、竹輪である。テーブルには他に枝豆・きゅうりの漬物・うどんの薬味(長ネギと紫蘇)・乾き物、そして柿岡の鮮魚仕出し「魚のぶ」のオードブルも用意された。後半には皿に盛られたうどん(実際はひやむぎの乾麺を茹でた物)が並べられ、だし汁で味わった。

宮司等は午前11時15分に退出したが、その後も和やかに正午過ぎ迄、直会が続いた。

3 後片付け

当番は翌15日(月・祝)午前6時にセンターに集合、神輿を小型軽トラックに載せて鹿島神社の神輿倉庫に納め、オカリヤを解体した。参道入口の幟を下し、同11時に解散した。

四 染谷祇園祭の特色と課題

お浜降り 年毎に若い神輿担ぎ手が少なくなっている。そのため、お浜降りを簡略化し、バケツで川の水を汲んで掛けることにしたいと当番は毎年思うが、なかなか実

行できない。自分たちの当番で伝統をなくすのは忍びないという。神輿が水に入らない形式だけのお浜降りが多い昨今、大変貴重な事例である¹⁷(写真13~16)。

染谷囃子 現在、染谷の祇園祭には山車が出ないので、「石岡のおまつり」町内で多く囃される染谷囃子は本家本元では聴かれない。昭和30年頃には、もう山車は出ていなかった。しかし、染谷囃子は有名で、パリや東京にも出張して演奏していた。結婚式や葬式にも呼ばれたこともあった。神事の最初と最後に大太鼓を叩くT氏は、「石岡のおまつり」時には香丸町の囃子連に属し、染谷囃子を演奏している。他にも地区は異なるが、同祭に囃子方として参加している人もいるという。山車の復活は難しいが、子供囃子の子供たちが染谷囃子を継承してくれることと期待されている。

渡御 最近はお浜降りの後、消防分団倉庫で休憩、オカリヤの建つセンターへ真直ぐ向かうことが多くなった。コースは当番に任せられているが、人数が少ないため最短コースとなる。渡御は神幸祭しんこうのみで、還幸祭かんこうは省略されている。平成に入ってから本来の3日間を2日間にしたという。

20年前は常磐自動車道近くの池袋、あるいは風土記の丘や栗田集落(かすみがうら市)近くまで渡御した。昭和3、40年代、青年会があった頃は夜遅くまで、しかも染谷全地区を渡御し、勇ましく神輿を揉み続けた。

また、巫女にふさわしい年齢の女子が少なく、当番内でまかなえない可能性が出て来た。さらに2坪毎の5組による輪番で祭を行ってきたが、存続するため来年の当番は3坪による可能性が高くなった。

おわりに

染谷の皆様は、御先祖様が築いてきた歴史や伝統を少しでも守っていかうとの気概に溢れていました。皆様とても親切で優しく、お蔭様で楽しく有意義に調査を進めることが出来、脱稿に至りました。

常陸國總社宮の石崎雅比古宮司、染谷区長・神社総代長を兼任される比氣貞夫様、田島坪当番長の篠田文雄様をはじめ、染谷の皆様には大変御世話になりました。誠にありがとうございました。

¹ 『石岡の地名』(石岡市教育委員会 1996) 131頁。

² (崙書房 1979) 154頁。

³ 『石岡の地名』131頁。『茨城県の地名』(平凡社 1982) 467頁には、寛永3年(1626)に旗本皆川氏領となったとある。

⁴ 『石岡の地名』131頁。明治43年「石岡誌」には、俗に陽竜神と称し、雨を掌る神とある(『石岡の地誌』(石岡市教育委員会 1981) 256頁)。

⁵ 9月の「石岡のおまつり(常陸國總社宮例大祭)」の奉祝祭でも、同神樂が奉納される。

⁶ 『石岡の石仏』（石岡市教育委員会 1996）300 頁に「須佐之男命」とあるが、確認できない。

⁷ （茨城県神社庁 1973）276 頁。

⁸ 福井県敦賀市曙町に鎮座する氣比神宮の分社。旧式内社（名神大社）、越前国一宮、旧社格は官幣大社。「北陸道の総鎮守」とも称され、祭神は伊奢沙別命（食物の神。衣食住の平穩を司る）。

⁹ （茨城県神社庁 1973）276 頁。『石岡市史 上巻』（石岡市 1979）405 頁に「情心」とあるのは、間違い。

¹⁰ 明治 43 年「石岡誌」に文安元年（1444）2 月 12 日の創建で宥弁上人の開基（『石岡の地誌』269 頁）。『新編常陸国誌』378 頁には本寺醍醐光台院、末寺 1 ヶ寺、門徒 9 ヶ寺とある。

¹¹ 明らかなさま。さかんなさま。威名の輝くさま。

¹² 素戔鳴尊。

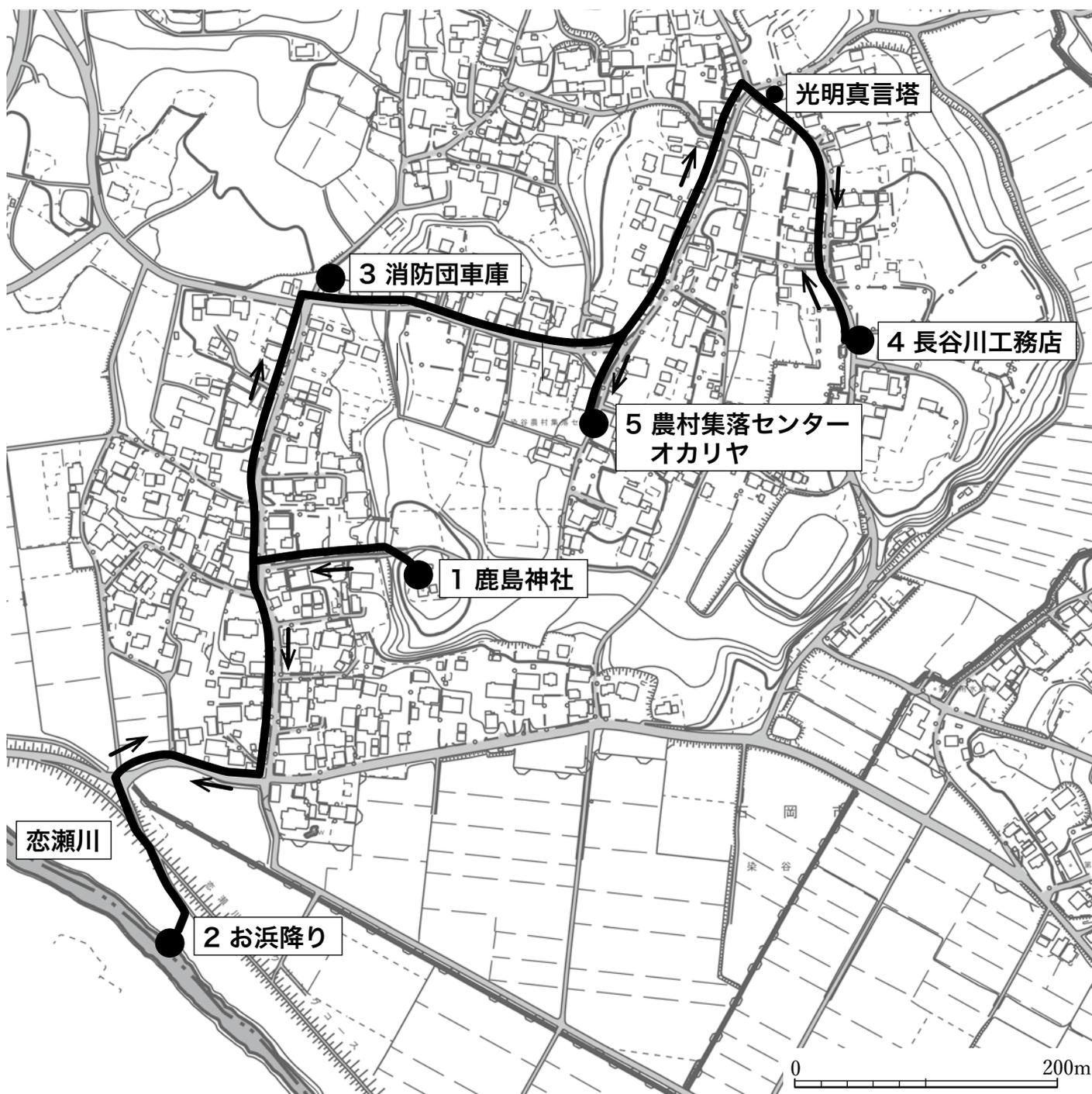
¹³ 右柱表「文政二己卯年」、左柱表「二月吉日 願主 若者」。

¹⁴ 右柱表「天保十四年」、同裏「願主 長谷川忠太夫」、左柱表「癸卯八月吉日」、同裏「願主 当村中」。

¹⁵ 古い神輿が鹿島神社社殿にあるが、天頂が鳳凰でなく龍なので、佐志能神社の神輿かもしれないという。『茨城県神社誌』276 頁に、佐志能神社の古来の祭祀として、正月 19 日に神輿渡御神事があったとある。

¹⁶ 小さな獅子頭の裏側に金色文字で「平成十四年五月吉日」とある。大獅子頭の箱蓋に墨書「寄贈 獅子頭 浅倉隆光 格納箱 浅倉一雄 昭和四十九年七月吉日」とある。

¹⁷ 行方市山田や麻生の祭では田や湖に神輿がお浜降りするが、行方市玉造や小美玉市竹原の祭では、代わりにバケツに汲んだ湖や川の水を神輿に掛ける。



染谷八坂神社祇園祭の神輿巡行図



1 染谷鹿島神社（右）と八坂神社（左）

2 八坂神社（左）と清心神社（右）



3 鹿島神社二の鳥居と宝持院



4 発輿式（鹿島神社社前 令和6・7・13）



5 渡御の供奉行列（左猿田彦、中央巫女2名）



6 恋瀬川に静々と下りる神輿



7 恋瀬川にお浜降りする神輿



8 子供会に曳かれ堂地坂を上がる幌獅子



9 渡御の健闘を称え合う神輿と幌獅子の頭合せ



10 オカリヤ (御仮屋 農村集落センター)



11 例大祭 (オカリヤ前 令和6・7・14)



12 直会の神社総代長挨拶 (センターホール)



13 小美玉市竹原の園部川へのお浜降り



14 冷えた御神体を温める (小美玉市竹原)



15 御神体が漂着した蓮田へお浜降り

← 行方市山田 ↓



16 行方市玉造のお浜降り

はじめに

石岡市におけるレプリカ法による土器の圧痕調査は、東大橋原遺跡で実施され、縄紋時代中期における茨城県域の植物利用の実態の一側面が明らかになりました（金子 2022・2023）。今回、さらに調査事例を増やすことによって、北関東の縄紋時代における植物資源の利用および土器作りの環境を探るため、白久台遺跡出土土器を対象として悉皆的に圧痕調査を実施しました。圧痕調査は2024年5月から12月までの週末に2日または3日間計11回実施し、白久台遺跡出土土器 総点数 34,000 点以上の全て、総重量 1 t 以上の調査をおこないました。

白久台遺跡の概要

白久台遺跡は、茨城県石岡市石岡駅東側台地上に所在する遺跡で、縄紋時代中期と古墳時代、平安時代の竪穴建物跡が検出されています（図1・2）。石岡駅東土地区画の整理事業に伴い1986年と1987年に発掘調査が実施されました（藤原ほか1987、安藤ほか1988）。その後も発掘調査が続けられ、報告されています（小杉山2012・2013など）。特に縄紋中期中葉～後葉に属する竪穴建物跡が4軒と土坑群が750基近く検出されており、石岡市を代表する縄紋時代中期の遺跡です。

調査方法

全ての土器片の点数と重量を計測し、土器の外面と内面、断面を観察して圧痕の有無を調べました。種実や動物の可能性のある圧痕については、実体顕微鏡下で水と筆を使って泥を完全に除去してからレプリカを作製しました。レプリカの作製方法は丑野・田川（1991）及び比佐・片多（2006）を参考にして、パラロイドB72の9%アセトン溶液を離型剤として圧痕内とその周りに塗布した後で、シリコン樹脂（JMシリコン インジェクションタイプ）を圧痕に充填しました。レプリカ作製後はアセトンを用いて離型剤を除去しました。レプリカにはISKD-R001 から試料番号を付けました。同定は明治大学黒耀石研究センターでおこない、何らかの種実もしくは動物と同定された圧痕について、株式会社パレオ・ラボに、走査型電子顕微鏡（(株)キーエンス製超深度マルチ

アングルレンズ VHX-D500）を用いて、非蒸着での撮影と計測を委託しました。電子線加速電圧は、1.2KV です。

同定結果

作製したレプリカ 121 点の内、106 点が何らかの種実及び動物などの圧痕であると同定されました。縄紋時代の土器から、ダイズ属種子やアズキ亜属(?)種子、シソ属果実、キハダ種子、ミズキ核、サンショウ属種子、オニグルミ(?)核、堅果類の果皮、不明鱗茎、不明種実に加えて、コクゾウムシ（註2）、不明昆虫、巻貝の動物が検出されました。その他、古墳時代の土師器からイネ粃3点と不明鱗茎1点が見つっています。さらに、編組製品の一部、繊維の束も縄紋土器から検出されました。

特筆すべきは、縄紋中期の土器の底から「縄紋原体」と呼ばれる施文具である縄紋の縄の圧痕が見つかったことです。実際に土器面の施紋に使われた縄紋原体そのものは見つからないため、土器圧痕から原体が再現できることに重要な意味があります。サイズは残存長 50mm、幅 3mm で2段の縄紋 LR の原体でした（図3）。

考察

（1）種実圧痕の組み合わせについて

佐々木（2019）によると、ダイズ属とアズキ亜属のマメ類、シソ属、キハダやミズキの漿果(しょうか)類は縄紋時代中期の中部高地、南関東において利用された植物の典型的な組み合わせで、本遺跡からも確認できました。昨年度、筆者らが調査した神奈川県相模原市上中丸遺跡の利用植物の組み合わせと比較しても（西本ほか 2025）白久台遺跡の利用植物の組み合わせとおおよそ共通しており、まだ調査事例の少ない北関東でも同様な傾向を確認できたことは大きな成果と言えます。

（2）縄紋原体について

縄紋原体の圧痕については、土器を観察すると、土器製作の最終段階で底部をきれいに調整した後で、土器を置いたところで意図せず原体が底部に貼り付いてしまったと推察できます。その後、土器が焼かれた時に、原体自体は燃えてしまって圧痕だけが残ったのです。

縄紋原体は、2024年におこなわれた日本考古学協会第90回総会において、千葉県千葉市加曾利貝塚出土の縄紋時代後期前葉堀之内式土器から縄紋原体の圧痕が見つかった事例が2例目として報告されています（佐々木ほか2024）。石岡市の原体圧痕は、全国で3例目となり、縄紋時代中期の土器のため、時期も少し遡りました。

（3）土器製作と圧痕の関係について

土器に付いた圧痕の位置を観察してみえてきたのは、土器の輪積みと圧痕の位置の関係でした。何かしらの同定ができた圧痕と輪積みとの最短距離が1mm未満のものが65%以上あり、相関が認められました（表1・図4）。つまり、縄紋土器は粘土紐を輪積みにして形を作りますが、この輪積み面に沿って土器が割れることが多く（戸村2020など）、圧痕は輪積み面に沿って付いている事例が多数であることが確認できました。これは、粘土紐の成形と圧痕との関係を示唆しています。

ただし、今回検出された圧痕は1つの個体または破片に単体または数点確認されており、1個体に数十点の種実圧痕が入った多量圧痕土器の研究結果（会田ほか2017）とは様相が違いますので、今後、さらなる検討を要する問題です。

小畑（2019）は圧痕研究において、種の同定や土器型式との関係から土器製作の環境に言及していますが、上述の通り、圧痕研究には、種実圧痕の同定、植物資源利用の研究に留まらず、圧痕の入り方から土器製作の工程を復元できる可能性があります。

おわりに

今回の白久台遺跡で行われた土器圧痕の悉皆調査は、石岡市だけでなく北関東の有用植物利用や土器づくりの実態を探るうえで大きな成果を上げることができました。種実や昆虫の圧痕の入り方から土器製作時の作業環境や土器作りの工程を復元できる可能性についても指摘することができました。縄紋原体については、このような事例を報告することにより、同様の事例がさらに追加報告されて資料が充実していくことを期待します。

今回の調査は日本学術振興会科学研究費の「圧痕レプリカ法と土器研究の組み合わせによる縄文社会復元の試み」（西本志保子、JP23K18716）及び「土器に残る動植物痕跡の形態学研究」（代表佐々木由香、JP20H05811）の費用の一部を使っています。また、今回の調査は年度内に別途正報告の予定です。

謝辞

今回の調査に際して、ご助力いただいた大野幸枝氏、富田道代氏、長谷川則子氏に感謝申し上げます。

註

（註1）西本志保子（中央大学人文科学研究所）、金子悠人（石岡市教育委員会）、奈良部大樹（中央大学文学研究科博士前期課程）、佐々木由香（金沢大学古代文明・文化資源学研究所）

（註2）コクゾウムシは、コメを食べる貯穀害虫として知られていますが、縄紋時代から生息しており、ドングリやクリを食べていたことがわかってきました（小畑2016）。縄紋時代のコクゾウムシの存在は、定住化や土器製作現場の環境を探るうえで重要な指標となります。

参考文献

- 会田進・酒井幸則・佐々木由香・山田武文・那須浩郎・中沢道彦 2017「アズキ亜属種子が多量に混入する縄文土器と種実が多量に混入する土器」『資源環境と人類』第7号 23-49頁
- 安藤敏孝 1988『白久台遺跡第2次発掘調査報告』茨城県石岡市教育委員会
- 丑野毅・田川裕美 1991「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』24 13-36頁
- 小畑弘己 2016『タネをまく縄文人』吉川弘文館
- 小畑弘己 2019『縄文時代の植物利用と家屋害虫』吉川弘文館
- 金子悠人 2022「東大橋原遺跡の圧痕調査」『第6回 石岡市文化財調査報告 発表要旨』石岡市教育委員会 1-4頁
- 金子悠人・西本志保子・小林謙一 2023「東大橋原遺跡における自然科学的分析 -レプリカ法による圧痕調査と年代研究を中心に-」『中央史学』第46号 13-28頁
- 金子悠人編 2024『市内遺跡調査報告書』第15集 石岡市教育委員会
- 小杉山大輔 2012「V発掘調査 白久台遺跡」『市内遺跡調査報告書』第7集 石岡市教育委員会 28-48頁
- 小杉山大輔 2013「Ⅲ発掘調査1. 白久台遺跡5次調査（2）遺物篇」『市内遺跡調査報告書』第8集 石岡市教育委員会 32-48頁
- 佐々木由香 2019「土器種実圧痕から見た日本における考古植物学の展開」『アフロ・ユーラシアの考古植物学』六一書房 180-194頁
- 佐々木由香・杉本亘・大網信良・山本華・佐藤悠人・長佐古真也・西野雅人 2024「加曾利貝塚における縄文中～晩期土器圧痕」

痕の特徴と地域性』『日本考古学協会第90回総会 研究発表要旨』日本考古学協会 64頁

戸村正己 2020 「『縄文土器の製作技法を探る(1):成形-「短冊状土器破片」が示す加曽利E式土器の成形について-』『貝塚博物館紀要』46 15-30頁

戸村正己 2020 「『縄文土器の製作技法を探る(2):加曽利E式土器の成形-土器破断面に記された“積み上げ角度”“接着度合い”-』『貝塚博物館紀要』48 35-59頁

西本志保子・佐々木由香・小林謙一・山本華・小林尚子 2022 「3. 清水が丘遺跡・武蔵国府関連遺跡東京競馬場地区の土器圧痕

調査』『新府中市史研究 武蔵府中を考える』第4号 府中市史編集委員会 23-33頁

西本志保子・金子悠人・奈良部大樹・佐々木由香・長澤有史 2025(印刷中) 「上中丸遺跡のレプリカ法による土器圧痕調査報告』『相模原市立博物館研究報告』第33集 相模原市立博物館

比佐陽一郎・片多雅樹 2006 「土器圧痕のレプリカ法による転写作業の手引き(試作版)」福岡市埋蔵文化財センター 1-12頁

藤原均 1987 『茨城県石岡市白久台遺跡調査概報』石岡市教育委員会・日本考古学研究所



図1 白久台遺跡の位置 (金子編 2024 に追記)



図2 白久台遺跡の調査区位置図 (小杉山 2012)

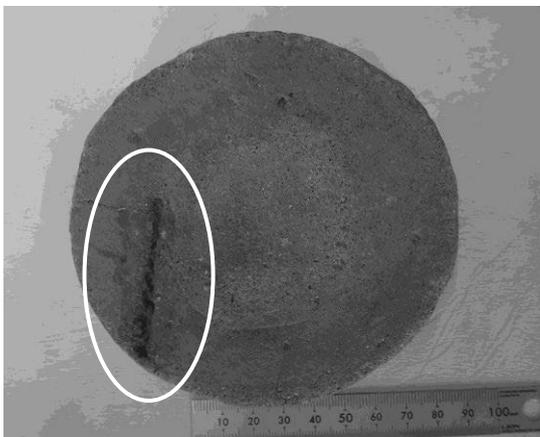


図3-1 土器底部 外面

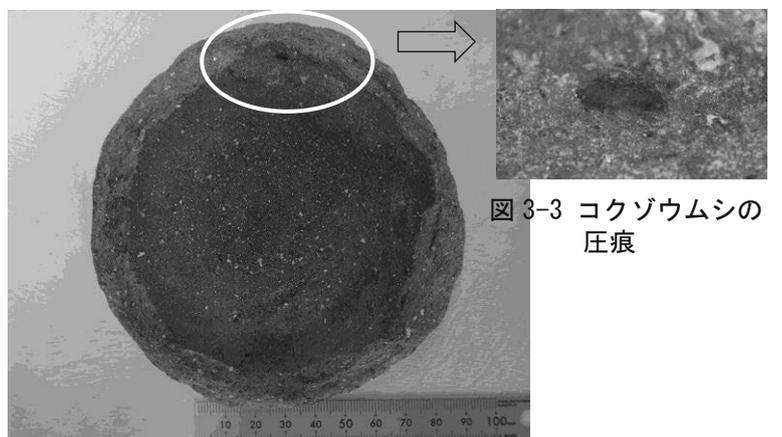


図3-2 土器底部 内面

図3-3 コクゾウムシの
圧痕

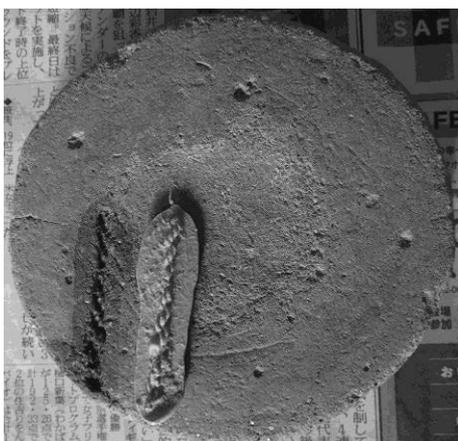


図3-4 縄紋原体のレプリカ

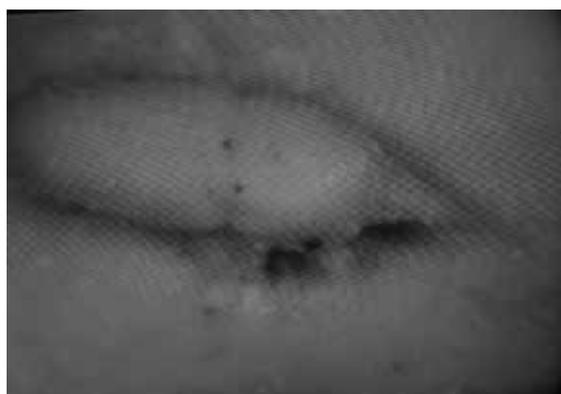


図3-5 コクゾウムシのレプリカ

試料			土器情報			輪積み情報		重量 (g)	圧痕情報	
遺跡名	試料 No.	遺構	土器型式	部位	付着 部位	輪積み との距離 (mm)	輪積み 自体の長さ (mm)		分類群名	部位
白久台	ISKD-R048	表採	加曾利 E	胴部	外面	0	22	20.6	シソ属	果実
白久台	ISKD-R049			胴部	外面	0			シソ属	果実
白久台	ISKD-R050			胴部	断面	18			シソ属	果実
白久台	ISKD-R051			胴部	断面	0			シソ属	果実
白久台	ISKD-R052			胴部	断面	0			シソ属	果実
白久台	ISKD-R053			胴部	内面	0			シソ属	果実

表 1 土器圧痕と輪積み 観察表 (一部)

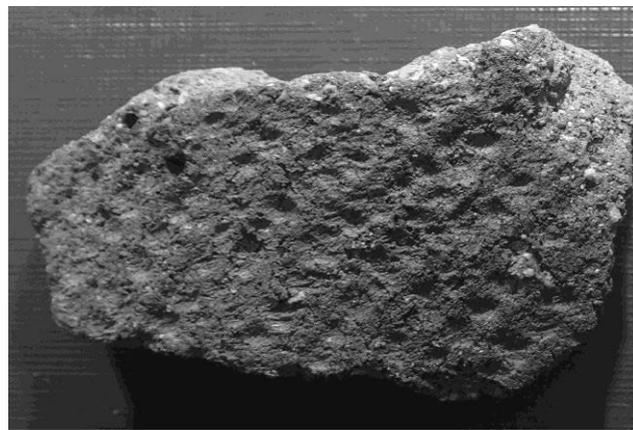


図 4-1 土器の輪積みと圧痕の位置

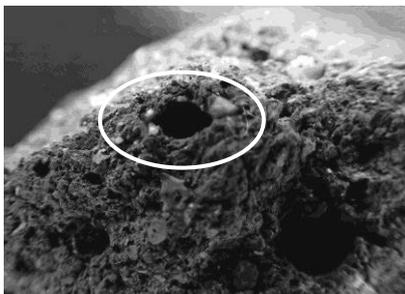


図 4-2 圧痕 (ISKD-R048)



図 4-3 圧痕 (ISKD-R049)



図 4-4 圧痕 (ISKD-R050)

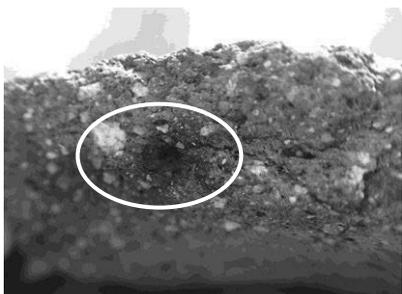


図 4-5 圧痕 (ISKD-R051)



図 4-6 圧痕 (ISKD-R052)

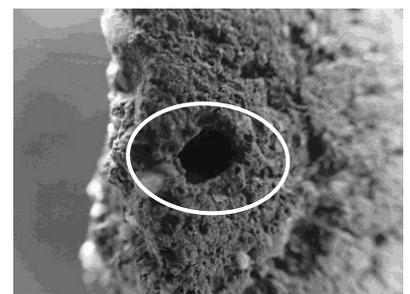


図 4-7 圧痕 (ISKD-R053)

東大橋原遺跡出土土器の再整理に向けて

石岡市東大橋

石岡市教育委員会 金子悠人

遺跡の概要

東大橋原遺跡は、茨城県石岡市東大橋に位置しています。標高 20～25m の石岡台地上に立地し、縄紋時代から奈良・平安時代までの遺構・遺物が検出されています。周辺は、遺跡北側に園部川を臨み、根古屋遺跡をはじめとした縄紋時代の遺跡が存在し、近世に至るまで連続した遺跡が存在してきた地域です（石岡市遺跡分布調査会 2001）。東大橋原遺跡の学術調査は、1977～1979 年まで 3 度にわたりおこなわれ（川崎ほか 1978、1979、1980 など）、以後も継続した試掘や発掘調査、自然科学分析、土器整理などが実施されています（小杉山 2007、小杉山・曾根 2008、2010、金子ほか 2023、金子ほか 2024 など）。

1978 年に実施された第 2 次調査では、縄紋時代の竪穴建物跡 3 棟、土坑 14 基が検出されました。その一つは土坑から白色粘土などの特徴的な遺物が検出され（川崎 1979、金子ほか 2023 など）、土器焼成遺構の可能性が指摘される（川崎ほか 1979 など）など石岡市のみならず、霞ヶ浦周辺の縄紋時代の様相を考えるうえでも重要な遺跡となっています。

しかしながら、正報は未だ出ておらず、様々な短報等でその実態が示されてきたものの（川崎 1979 ほか、横山 1982・1985）、不明な部分も多く残っています。今回は、遺構図に残されていた情報から出土土器の図示をおこない、再整理へ向けた足掛かりとしたいと思います。

整理の対象

石岡市教育委員会に残されていた遺構図や写真から、詳細な検討ができた 1978 年に発掘された B-6 号土坑の復元を試みました。

出土遺物の整理

残されていた遺構図からの遺物の特定は限定的でしたが、出土遺物を確認すると小破片に至るまで注記が丁寧に行われており、写真などとの総合的な判断から、B-6 号土坑からの出土が確定的と思われる土器に限り図化しました（図 1）。そのため、掲載した土器がすべてではありません。

1 は、阿玉台 I b 式。隆線脇に単独で細い押引紋または

先端がハスに切られた工具による押引紋が沿います。2 と 3 は同一個体か。いずれも隆線上に縄紋を転がし、多状の沈線を沿わせます。3 は沈線により文様を作出しています。勝坂式の影響が考えられます。4～8 は中期中葉末か。4 は口縁部内面に弱い稜があり、口縁直下には指頭による沈線が施されます。体部は縄紋が間隔をあけて施されています。体部と異なる方向に口縁部にも縄紋が施されます。5 の口縁部は断面カマボコ状の稜を持つ箇所と直下の調整が一体化し、明確な稜を持たない箇所に分かれます。波状口縁です。6 の口縁部は稜を持ち、直下は調整痕が残ります。器面は荒いです。7 は蛇行沈線が垂下しています。縄紋が間隔をあけて施されます。8 は口縁部内面に弱い稜があり、口縁直下は粗雑な調整がなされます。体部は間隔をあけて無節縄紋が施されます。一部異なる方向の無節縄紋が口縁部に施されています。9 は阿玉台 IV 式か。カマボコ状の隆線脇に 2 本の沈線が沿います。10・11 は無節縄紋、12～14 は間隔を開けた単節縄紋、15 は単節縄紋がそれぞれ施されます。16 は器面が荒く判別が難しいですが、縄紋が施されているようです。

また、既に報告済のものとして、写真 1～7 があります（図 2）。1 は阿玉台 IV 式、2 は「V 字状貼付文土器」（金子 2024）、3～7 はいずれも中期中葉末のものと考えられます。細別時期としては、一部異なるものも含まれますが、概ね 1 時期に収まります。

遺構図の整理

今回検討した B-6 土坑の遺構図には、幸運にも眼高とエレベーションメモが残されていました（メモ 1、表 1）。また、大個体の破片と思われるスケッチも 2 点残されており、これらを写真とも整合することで、遺物の出土した高さが特定できます。これと層位を重ね合わせることにより、おおよその遺物出土位置を特定することができました。

図 3 の左が遺構図の生データをなぞったもの、右がエレベーションのメモから復元した遺物の出土位置です。B-6 号土坑は、1-4 層が明褐色土層、5-6 層が暗褐色土層、

7-8 が明褐色土層と記されており、4 と 5 の間に区切りのように線が引かれています。層位は 1-4 層、5-6 層、8 層のまとまりで考えることができそうです。

遺物の出土位置と層位の生データから、1-6 層にわたって遺物が認められること、特に 8 層が形成された後に遺物が廃棄された可能性が考えられました。

まとめ

出土遺物と遺構図の整理から B-6 号土坑の形成を考えてみます。

まず、8 層が形成されます。ここには管見の限り遺物は出土していません。次に 5-6(7?)層が形成されます。この層の中位には遺物が多く入り込んでおり、まとめて土器が廃棄されたものと思われます。その後、3-4 層が形成されますが、ここでも遺物が連綿と入り込んでおり、遺物の細別時期は概ね一時期に収まる一方で、廃棄行為は断続的におこなわれている様子を推察することができます。

現在刊行されている報告書では、「出土レベルもかなりのばらつきがあり」との表現にとどまっていますが、メモに残された遺物を総合的に観察することで、土坑の形成過程を追うことができました。

今後、さらに多くの情報を積み重ねることで東大橋原遺跡全体の遺構の復元に努めていくこととします。

参考文献

- 川崎純徳・海老沢稔・黒沢彰哉・松本裕治 1978『石岡市東大橋原遺跡—第 1 次調査報告—』石岡市教育委員会
川崎純徳・黒沢彰哉・海老沢稔・松本裕治・川又清明・横山仁 1979『石岡市東大橋原遺跡—第 2 次調査報告—』石岡市教育委員会
川崎純徳 1979「フラスコ状土坑小考—石岡市東大橋原遺跡 3 号土坑素描—」『常総台地』10
川崎純徳・海老沢稔・横山仁 1980『石岡市東大橋原遺跡：第 3 次調査報告』石岡市教育委員会
横山仁 1982「石岡市東大橋原遺跡出土の加曾利 EI 式土器の考察口(上)」『婆良岐考古』4
横山仁 1985「石岡市東大橋原遺跡出土の加曾利 EI 式土器の考察(中)」『婆良岐考古』7
石岡市遺跡分布調査会 2001『石岡市遺跡分布調査報告』石岡市教育委員会
合田恵美子 2001「袋状土坑における覆土形成過程の復元—土

器出土状況の分析を中心として—」『研究紀要』9 (財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター

小杉山大輔 2007『市内遺跡調査報告書』2 石岡市教育委員会

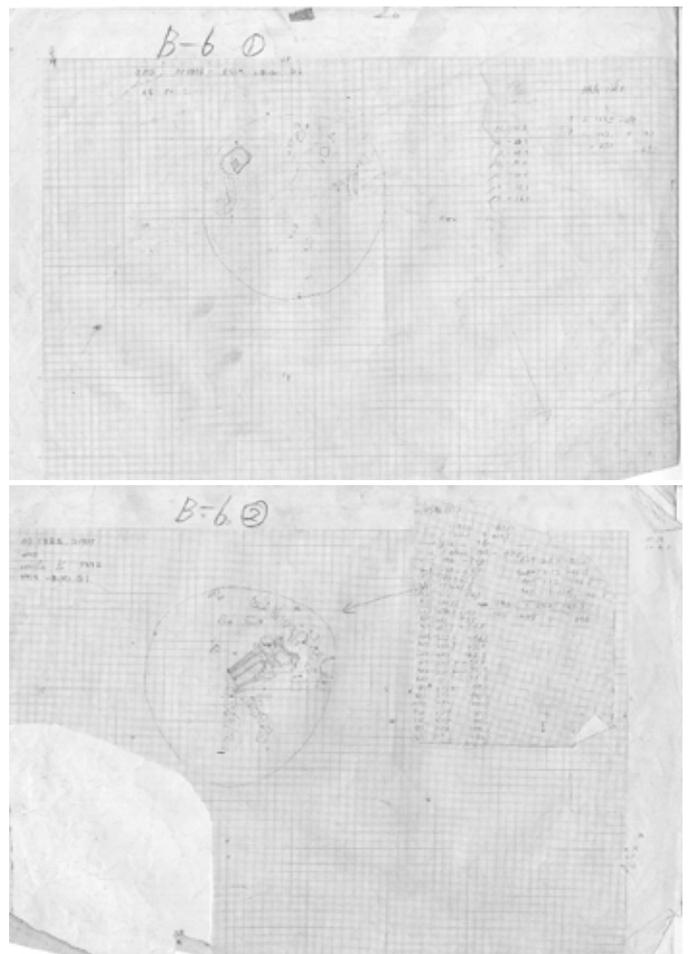
小杉山大輔・曾根俊雄 2008『市内遺跡調査報告書』3 石岡市教育委員会

小杉山大輔・曾根俊雄 2010『市内遺跡調査報告書』5 石岡市教育委員会

金子悠人・西本志保子・小林謙一 2023「東大橋原遺跡における自然科学的分析—レプリカ法による圧痕調査と年代研究を中心—to」『中央史学』46

金子悠人 2024「縄紋中期中葉の(仮称)「V 字状貼付文土器」について—茨城県域を中心に—」『下総考古学』26

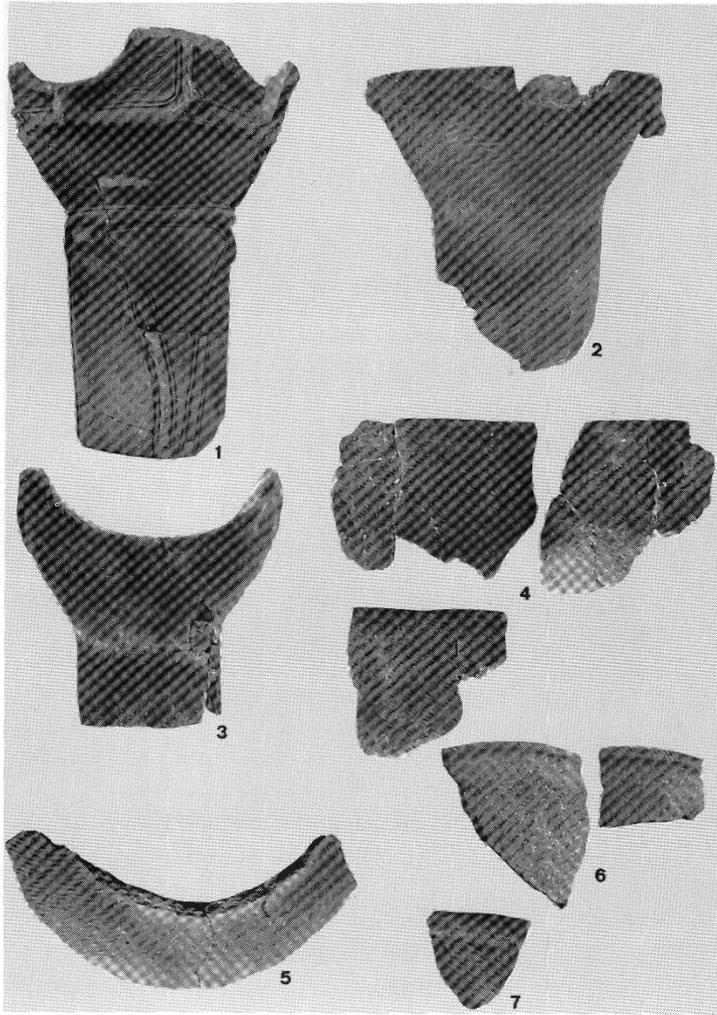
金子悠人・奈良部大樹・佐々木由香 2024「東大橋原遺跡における縄紋中期土器底部敷物圧痕からみた土器の製作工程」『資源環境と人類』14



メモ 1 遺構図に残されたエレベーションのメモ



图1 B-6 土坑出土遺物 (S=1/3)



PL-65, B-6号土壙出土遺物 (縮尺不同)

図2 過去に報告された図版(川崎ほか 1980 : 47 引用)

遺物番号	レベル	対象遺物	層位
4		-17	1-4層
5		-20	
6		-26	
7		-26	
9上	163	-27.5 写真図版5	
8上	164.5	-29 写真図版2	
1		-41.5	
20	177	-41.5	
3		-45	
9下	183	-47.5 写真図版5	
16	184	-48.5 石	
19	188	-52.5	
2		-54	
17	192	-55.5	
43		-59.5	
18	199	-63.5	
28	204	-68.5	5-6層
22上	204.5	-69 写真図版1	
27	205.5	-71 石	
14上	205.5	-71	
29	208.5	-73	
25	209.5	-74	
30	209.5	-74	
23stone	209.5	-74 石	
21	210	-74.5	
24	211	-75.5	
42	211	-75.5	
15	212	-75.5	
26	212	-75.5	
31	212	-75.5	
40	212	-75.5	
41	212	-75.5	
32	213	-77.5	
33	214	-78.5	
35	214	-78.5	
36	215	-79.5	
34	216	-80.5	
37	216	-80.5	
38	216	-80.5	
14T	210.5	-81	
39	217	-81.5	
22T	222	-85.5 写真図版1	
10		記載なし	
11		記載なし	
12		記載なし	
13		記載なし	
14		記載なし	

EL _____ 表1 メモから復元した遺物の出土位置

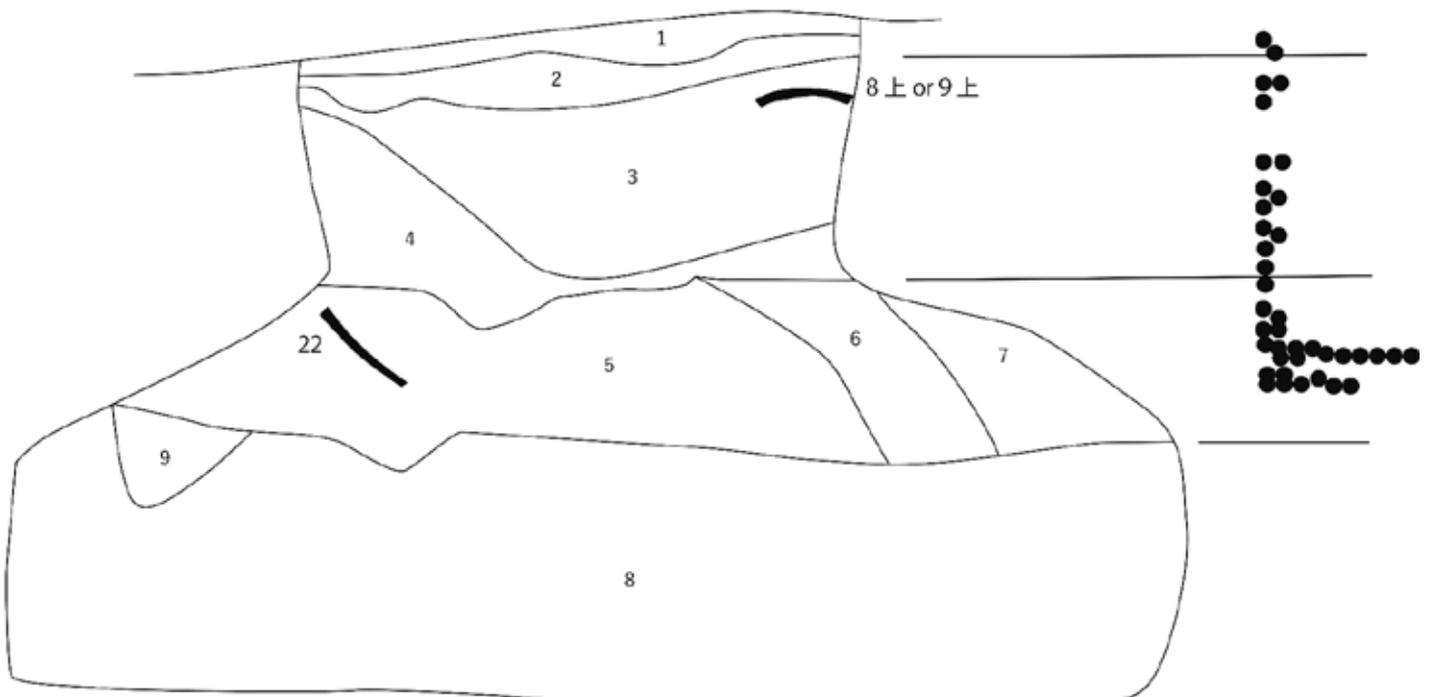


図3 遺構図の生データ(左)と遺物出土位置図(右黒丸)

「舟塚山型」円墳

石岡市教育委員会 谷仲俊雄

はじめに

舟塚山古墳は、茨城県下最大、東日本第2位の墳丘規模を誇る前方後円墳です。築造されたのは5世紀初頭前後、古墳時代中期前葉と考えられています（井 2024、図1）。

古墳時代中期の常陸南部では、「舟塚山型」前方後円墳と大型・中型円墳が築造され、「舟塚山古墳体制」と称される秩序ある古墳構成を示すとされています（田中 1988、滝沢 1994、小沢・田中 2012）。「舟塚山型」前方

後円墳とは、舟塚山古墳の墳丘築造規格を共有するもので、「香取海」の広範囲に分布しています。

本報告では、大型・中型円墳についても舟塚山古墳後円部と規格を共有する「舟塚山型」円墳との結論を得ましたので、検討の過程を提示します。

小美玉市塚山古墳

小美玉市下玉里に所在する墳丘径61mの大型円墳です（小林・石川・佐々木 2005、佐々木ほか 2016）。図2は、

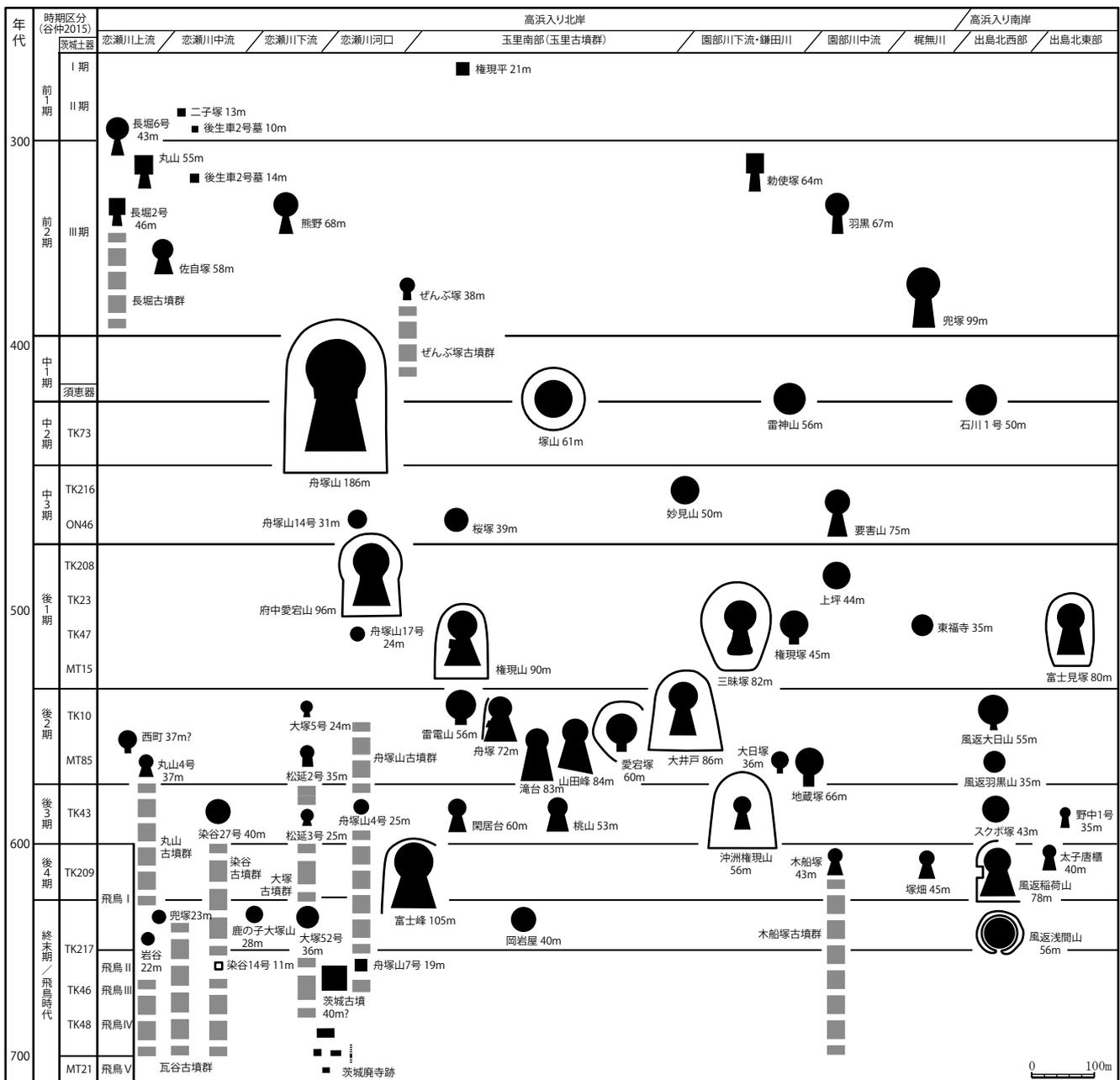
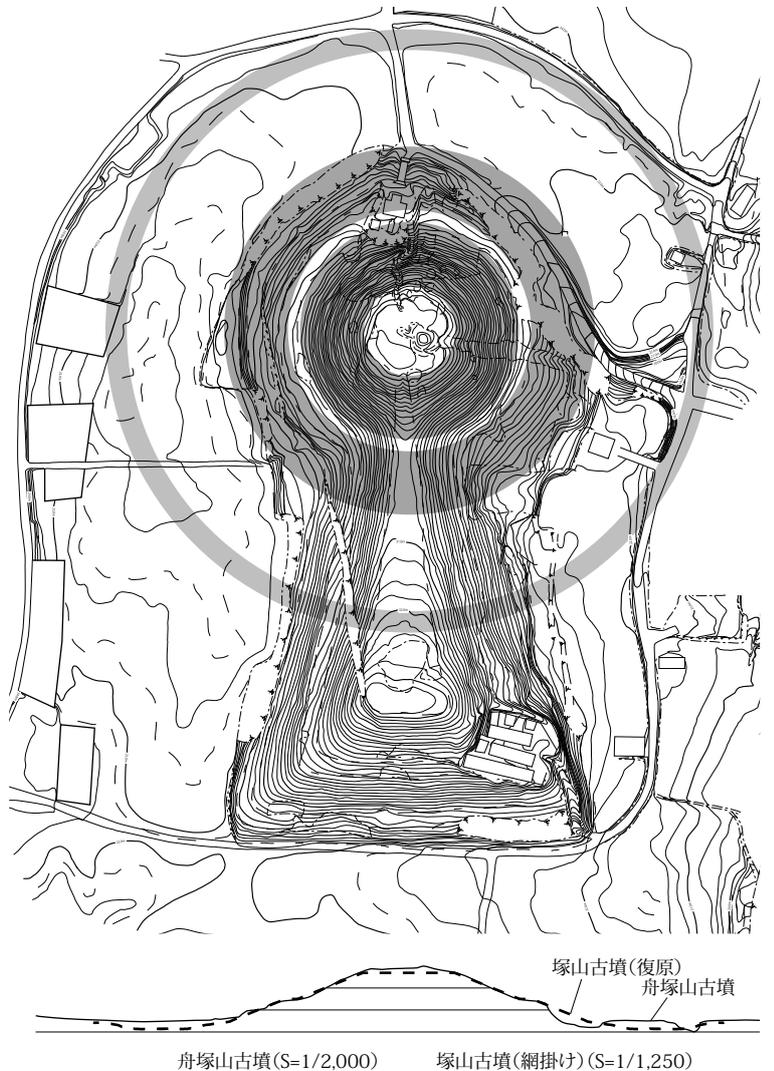


図1 霞ヶ浦高浜入りの古墳編年

舟塚山古墳の測量図に、後円部径と墳丘径を一致させた塚山古墳の復原図を合成したものです。塚山古墳の上段と舟塚山古墳の上段の墳頂平坦面やテラス面がよく一致しています。墳裾については、舟塚山古墳の遺存状態が悪いものの、塚山古墳の復原ラインとの矛盾はありません。周溝外郭についても、舟塚山古墳が盾形を呈するのを除き、概ね一致しています。

両者のエレベーション図を比較しても、よく一致しているのがわかります。異なるのは、舟塚山古墳は低平な1段目をもつ三段築成なのに対し、塚山古墳は二段築成な点です。しかし、塚山古墳は、中段テラス以下で原状を留めている傾斜が存在しないことから、二段築成であったのか、舟塚山古墳と同じく低平な1段目が存在していたのかは不明です。残念ながら今はこの点について検証する術はありませんが、ここでは塚山古墳と舟塚山古墳の後円部が、周溝までも含めて類似していて、立体的な構成も課題は残すものの非常に近い関係にあることを確認して、築造規格を共有している可能性を指摘しておきます。



舟塚山古墳(S=1/2,000) 塚山古墳(網掛け)(S=1/1,250)

図2 塚山古墳と舟塚山古墳

笠間市御前塚古墳

塚山古墳の北西約16.5km、東茨城台地を東西に走る分水嶺の起点付近に位置します(岩間町1991、岩間町史編さん委員会2002、地域文化財コンサルタント2008)。図3上は、半裁した御前塚古墳の測量図に、墳丘径を一致させた塚山古墳の測量図を合成したものです。図3下は、御前塚古墳の測量図に墳丘径を一致させた塚山古墳の復原図を合成したものです。両者の墳頂平坦面や中段テラス、周溝外郭がよく一致しているのがわかります。

しかし、エレベーション図を見ると、塚山古墳の方が相対的に高く、立体的な構成は異なるように見えます。そこで、もう少しエレベーション図を詳しく見ると、上段から中段テラスまでは両者はほぼ一致しています。異なるのは中段テラス以下の下段部で、御前塚古墳は塚山古墳よりも相対的に低くなっています。この部分以外の平面形態、立体的な構成がよく一致していることから、御前塚古墳の築造規格は塚山古墳、もしくは塚山古墳と築造規格を共有している舟塚山古墳後円部の築造規格のうち、下段部分の高さを圧縮したものと考えられます。

小美玉市雷神山古墳

塚山古墳の北東約2.5km、園部川と鎌田川が接近して霞ヶ浦に流入する台地上に位置しています(小川町史編さん委員会1982、本田2010・2020)。図4上は、半裁した塚山古墳の測量図に、墳丘径を一致させた雷神山古墳の測量図を合成したものです。図4下は、雷神山古墳の測量図に墳丘径を一致させた塚山古墳の復原図を合成したものです。雷神山古墳は支谷の入り込んだ台地上に立地していることから、周溝が全周していた可能性は低いと考えられます。しかしそのほかの墳頂平坦面や中段テラスは両者がよく一致しているのが見て取れます。

また、エレベーション図からも両者の立体的な構成も近いことがわかります。したがって、雷神山古墳の築造規格は塚山古墳、もしくは塚山古墳と築造規格を共有している舟塚山古墳後円部の築造規格の周溝部分を変更したものと考えられます。

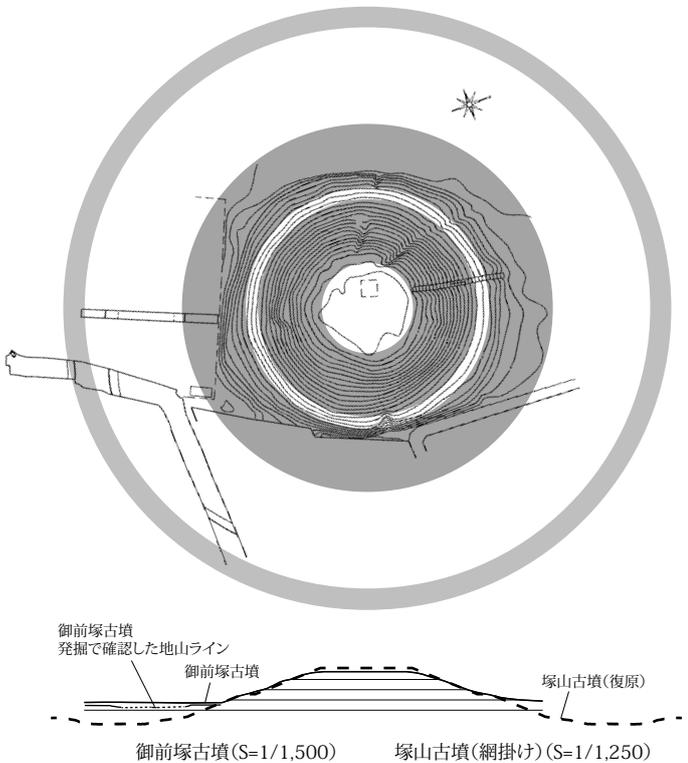
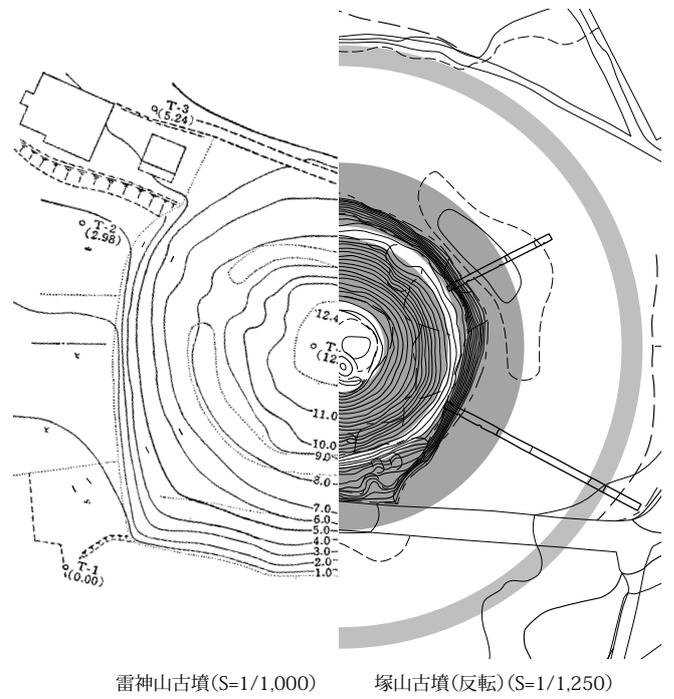
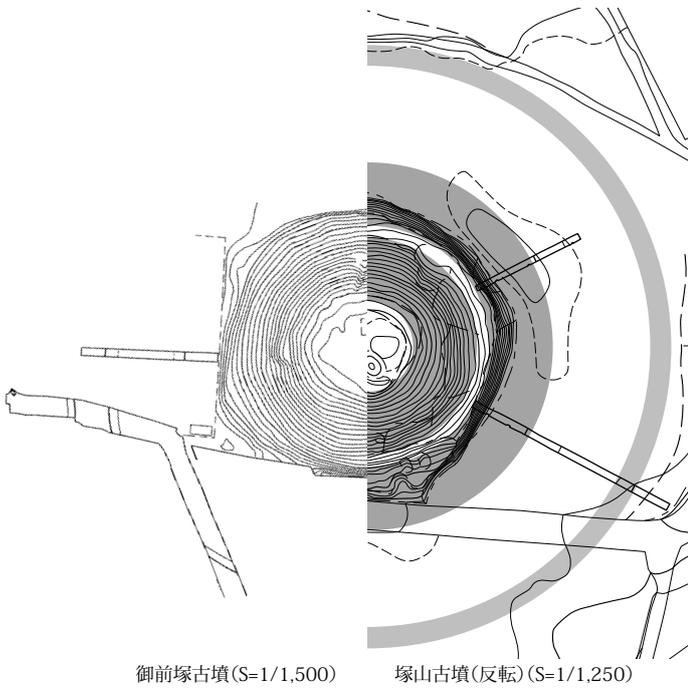


図3 塚山古墳と御前塚古墳

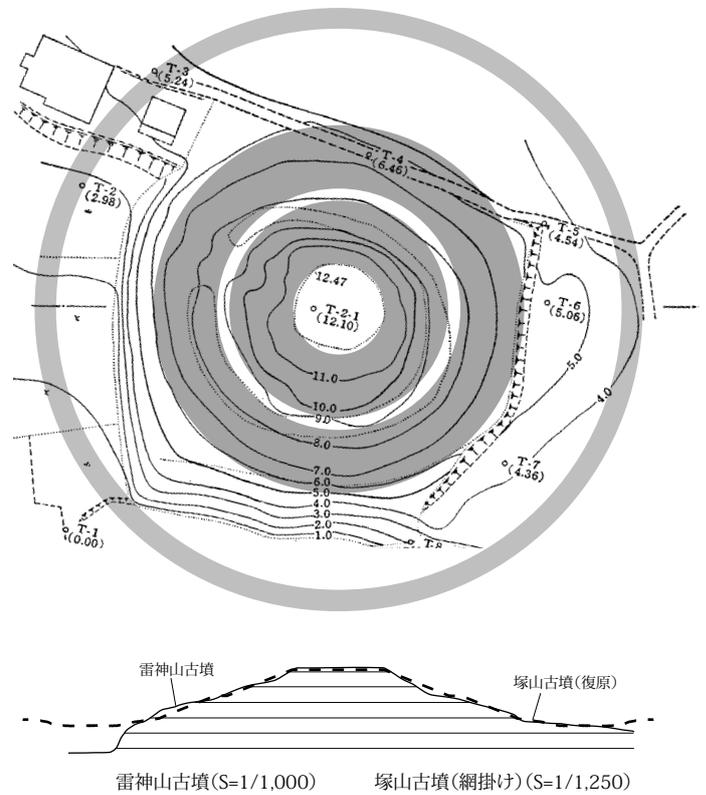


図4 塚山古墳と雷神山古墳

石岡市石川1号墳

塚山古墳の南西約2.3km、高浜入り対岸の台地上に位置しています(石岡市遺跡分布調査会2001)。測量調査は行われていないことから、谷謙二開発の「Web 等高線メーカー」サイトで、地理院タイル(標高タイル)より等高線図を作成しました。図5は、作成した石川1号墳の等高線図に墳丘径を一致させた塚山古墳の復原図を合成したものです。等高線図の精度に問題があるものの両者の墳頂平坦面は一致していて、現地で確認できる石

川1号墳の中段テラスの位置も塚山古墳のものと近似しています。

周溝については石川1号墳の立地からは全周していた可能性は低いと考えられます。詳細は石川1号墳の詳細な測量図を待たなくてはいいけないですが、ここでは石川1号墳の築造規格は塚山古墳、もしくは塚山古墳と築造規格を共有している舟塚山古墳後円部の築造規格の周溝部分を変更したものである可能性を指摘しておきます。

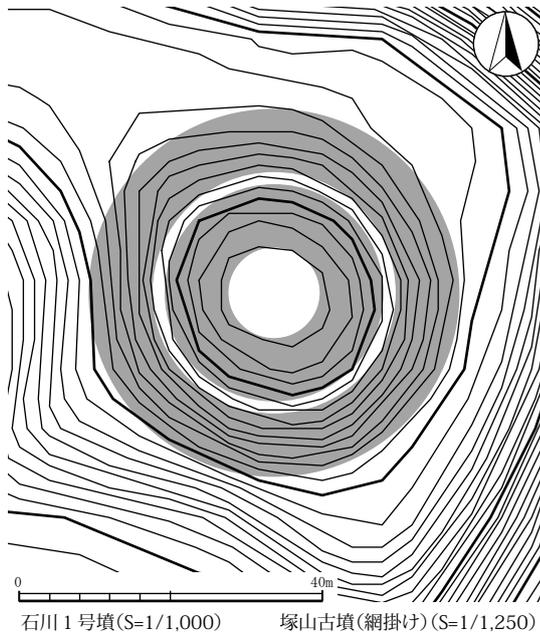


図5 塚山古墳と石川1号墳

「舟塚山型」円墳

以上の検討から、次のことが指摘できます。

- ・塚山古墳の築造規格は石岡市舟塚山古墳後円部の築造規格を共有している可能性が高い
- ・塚山古墳または舟塚山古墳後円部の築造規格を共有している可能性があるものとして、笠間市御前塚古墳、小美玉市雷神山古墳、石岡市石川1号墳がある

墳丘規模から、前方後円墳であり墳丘長180mを超える舟塚山古墳の後円部の築造規格が円墳へと「模倣」されたものと考えられます。それは下段高さの圧縮（御前塚古墳）、周溝部分の変更（雷神塚古墳、石川1号墳）からも指摘できます。

ただそれは、各円墳が舟塚山古墳を「模倣」したのか、それとも墳形以外の変更がない塚山古墳を経由したのでしょうか。それを解く手がかりとして再度、塚山古墳と御前塚古墳の比較を確認します。図3は墳丘径を一致させたものですが、両者の比率は6:5となっていて、墳丘規模は御前塚古墳が塚山古墳よりも大きい（塚山古墳の6/5）。しかし、御前塚古墳の墳丘高は舟塚山古墳や塚山古墳に比べ、圧縮されています。御前塚古墳が塚山古墳の築造規格を「模倣」し、しかし規模はそれを上回るものしたとは考えにくいところです。舟塚山古墳後円部の築造規格を塚山古墳、御前塚古墳それぞれが「模倣」したと考えるのが自然でしょう。雷神塚古墳、石川1号墳については、塚山古墳よりも規模が小さい（塚山古墳の4/5）ことから、塚山古墳を経由した可能性は残ります。しかし、塚山古墳、御前塚古墳は舟塚山古墳の築造

規格を「模倣」したと考えられることから、これらを「舟塚山型」円墳と呼びたいと思います。

「舟塚山型」前方後円墳と円墳

「舟塚山型」前方後円墳は、2/3規模の香取市三ノ分目大塚山古墳を頂点に、1/2のつくば市宮山観音山古墳、2/5のつくば市土塔山古墳、潮来市大生稲荷塚古墳、1/3のかすみがうら市牛渡銚子塚古墳、我孫子市水神山古墳と広範囲にわたります（田中1999・2012）。

今回指摘した「舟塚山型」円墳は、舟塚山古墳の後円部3/4規模の御前塚古墳、後円部5/8の塚山古墳、後円部1/2の雷神山古墳、石川1号墳となります。

それらをまとめた図6を見ると、舟塚山古墳の2/5規模と舟塚山古墳後円部の3/4規模が近似しています。また、舟塚山古墳の1/3規模と後円部の5/8規模も近似しています。舟塚山古墳の墳丘規模は発掘調査による確定はできていませんが、測量調査に基づく復原によれば、墳丘長183.3m、後円部径96.2mとされています（佐々木編2018）。つまり、2/5規模は約73.32m、後円部3/4規模は約72.15m、1/3規模は約61.1m、後円部5/8規模は約60.125mとなります。前方後円墳と円墳という墳形の違いがあるなかでの規模の近似であることから、墳丘長や後円部径の整数比による縮小というよりも、墳丘規模を優先して設定されていたと考えたほうが良いでしょう（岸本2004、柴原2020）。

おわりに

本報告では、舟塚山古墳後円部と規格を共有する「舟塚山型」円墳を提唱し、また「舟塚山型」の前方後円墳と円墳との間で規模の近似が認められることから、整数比による築造規格の縮小ではなく、墳丘規模を優先して設定された可能性を指摘しました。

本報告で指摘した「舟塚山型」円墳が所在するのは舟塚山古墳の周辺のみで、「舟塚山型」前方後円墳に比べると限定的です。これが単に筆者の探索不足なのか、それとも舟塚山古墳の周辺に「舟塚山型」円墳が存在し、その外側に「舟塚山型」前方後円墳が存在するという構造となっているのかは今後の課題にしたいと思います。また、築造規格の整数比による縮小ではなく、墳丘規模が優先されたとする場合、その単位が問題となります。先学を参考としながら、地域の実態を検討していきたいと思います。

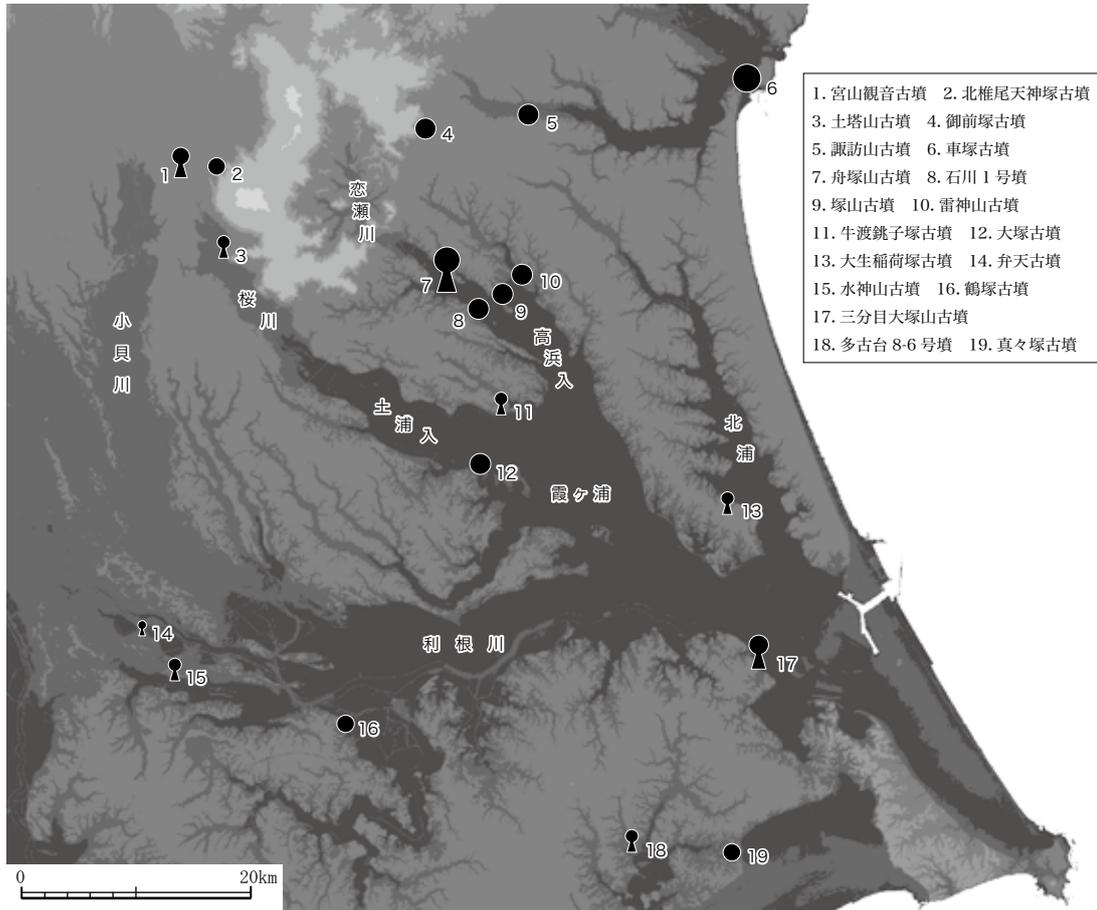
文献

- 井 博幸 2024 「茨城県舟塚山古墳採集埴輪の再検討」『茨城県考古学協会誌』36、pp. 1-30.
- 石岡市遺跡分布調査会 2001 『石岡市遺跡分布調査報告』石岡市教育委員会
- 今城未知 2018 『前方後円墳の三次元復原と設計原理の考古学的研究』総合研究大学院大学
- 岩間町 1991 『図説岩間の歴史』岩間町
- 岩間町編さん委員会 2002 『岩間町史』岩間町
- 小川町史編さん委員会 1982 『小川町史』上巻、小川町
- 小沢洋・田中裕 2012 「関東沿岸」『古墳出現と展開の地域相』古墳時代の考古学2、同成社、pp. 202-220.
- 岸本直文 2004 「前方後円墳の墳丘規模」『人文研究』55-2、大阪市立大学大学院文学研究科紀要、pp. 27-70
- 小林三郎・石川日出志・佐々木憲一編 2005 『茨城県霞ヶ浦北岸地域における古墳時代在地首長層の政治的諸関係理解のための基礎研究』平成13～16年度科学研究費補助金研究成果報告書、明治大学考古学研究室
- 佐々木憲一・田中裕・岩田薫・阿部芳郎・小野寺洋介・尾崎裕妃・木村翔・土井翔平 2016 「茨城県小美玉市塚山古墳2010年度発掘調査報告」『古代学研究所紀要』第24号、pp. 45-77.
- 佐々木憲一編 2018 『霞ヶ浦の前方後円墳-古墳文化における中央と周縁-』明治大学文学部考古学研究室
- 柴原総一郎 2020 「前方後円墳の墳丘長の規格性」『東京大学考古学研究室研究紀要』33、pp. 155-182.
- 曾根俊雄 2005 「玉里古墳群の墳丘について-系譜整理を中心に-」『茨城県霞ヶ浦北岸地域における古墳時代在地首長層の政治的諸関係理解のための基礎研究』平成13～16年度科学研究費補助金研究成果報告書、明治大学考古学研究室、pp. 111-125.
- 滝沢 誠 1994 「筑波周辺古墳時代首長系譜」『歴史人類』22、筑波大学歴史・人類学系、pp.
- 田中広明 1988 「霞ヶ浦の首長-茨城県出島半島をめぐる古墳時代の研究-」『婆良岐考古』10、pp. 11-50.
- 田中 裕 1999 「茨城県霞ヶ浦町牛渡銚子塚古墳の測量調査」『筑波大学先史学・考古学研究』10、pp. 91-106.
- 田中 裕 2012 「古墳時代中期における東関東の地域社会」『平成23年度千葉県遺跡調査研究発表会要旨』pp. 7-14.
- 玉里村村内遺跡分布調査団 2004 『玉里の遺跡-玉里村村内遺跡分布調査報告書-』玉里村教育委員会

- 地域文化財コンサルタント 2008 『御前塚古墳群・北浦東遺跡-市道改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』笠間市教育委員会
- 東京大学文学部考古学研究室 1969 『我孫子古墳群』我孫子町教育委員会
- 西野 元編 1991 『古墳測量調査報告書(特)-茨城県南部古代地域史研究-』筑波大学歴史・人類学系
- 本田信之 2010 「小美玉市旧小川町・美野里町域の古墳群」『常陸の古墳群』六一書房、pp. 149-170.
- 本田信之 2020 「霞ヶ浦北岸の「玉里古墳群」とその周辺」『古代文化』72-2、pp. 48-56.
- 増田精一編 1982 『筑波古代地域史の研究』筑波大学
- 茂木雅博・田中裕貴 2005 『常陸の前方後円墳(2)』茨城大学人文学部考古学研究室
- 谷仲俊雄 2020 「舟塚山古墳と常陸南部の中期古墳」『古代文化』72-2、pp. 28-34.
- 谷仲俊雄 2024 「霞ヶ浦高浜入りにおける古墳の様相」『博古研究』64、pp. 51-63.

挿図出典

- 図1 筆者作成
- 図2 舟塚山古墳：佐々木編2018より筆者作成
- 図3 御前塚古墳：地域文化財コンサルタント2008より筆者作成
- 図4 雷神山古墳：小川町史編さん委員会1982より筆者作成
- 図5 石川1号墳：地理院タイル(標高タイル)を谷謙二開発「Web等高線メーカー」サイトで作成より筆者作成
- 図6上 地理院地図を利用して筆者作成
- 図7下 舟塚山古墳：佐々木編2018、三ノ分目大塚山古墳：今城2018、宮山観音古墳：西野編1991、土塔山古墳：増田編1982、大生稲荷塚古墳：茂木・田中2005、御前塚古墳：地域文化財コンサルタント2008、牛渡銚子塚古墳：田中1999、水神山古墳：東京大学文学部考古学研究室1969、塚山古墳：小林・石川・佐々木編2005、雷神山古墳：小川町史編さん委員会1982、石川1号墳：地理院タイル(標高タイル)を谷謙二開発「Web等高線メーカー」サイトで作成より筆者作成



地理院地図を利用して作成

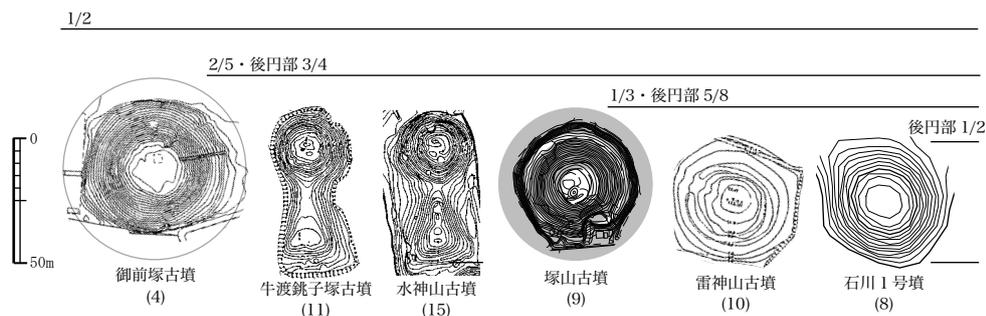
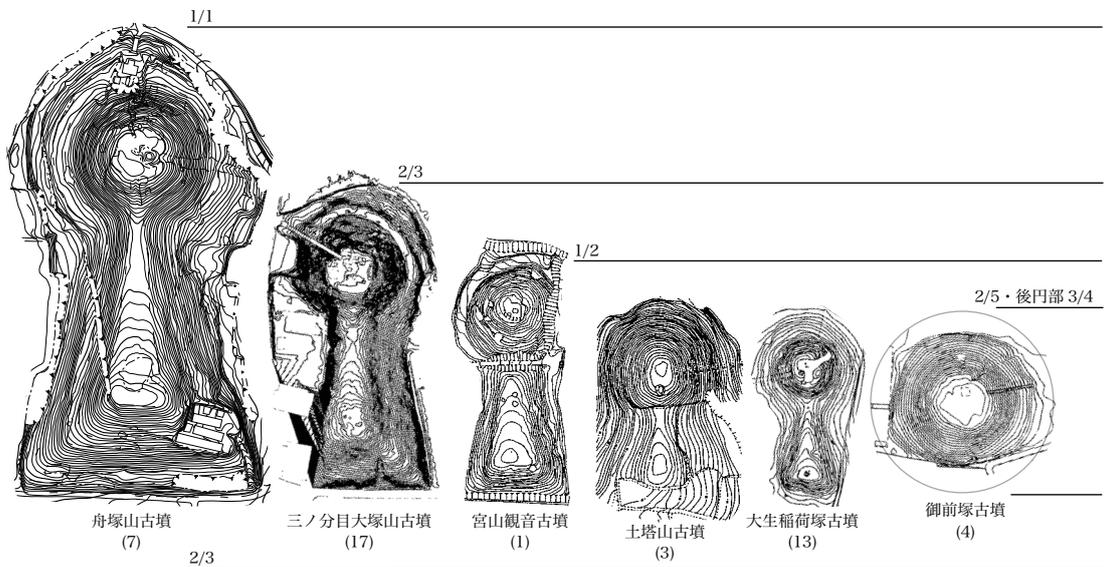


図6 霞ヶ浦沿岸における中期前半の古墳分布と「舟塚山型」前方後円墳・円墳

水戸藩領井関村の人別証拠

石岡市井関

石岡市教育委員会 竹内 智晴

井関村の概要

井関村は石岡市城南端、現在の石岡市井関地区に存在した村落です。近世（≒江戸時代）には、隣接する石川村（現在の石岡市石川地区）とともに水戸藩の支配を受けていました。水戸藩に関連する文化財として、盛賢寺阿弥陀堂（市指定有形文化財）や山崎の鹿島神社、八木の縄とき地蔵などがあります。

井関村に関連する史料群として関川文書があります。その名が示す通り井関・石川地区に関する文書群で、近世から近代にかけての井関村、石川村、そして市町村制施行後の関川村で収集・作成された文書で構成されています。年代が確認できるものの中で最も古い文書は寛永18年（1641）の検地水帳で、井関村・石川村ともに残ります。反対に最新の文書は昭和25年（1950）の旧関川村役場事績簿です。文書が300年以上にわたり蓄積されていますが、その中でも寛政期（1789～1800）から明治10年代（1877～1887）までの文書が特に多く、近世後期から近代への変化の時期がわかる良好な史料群です。

人別証拠とは

今回「人別証拠」とする史料は、各村落において人の移動が発生した際に作成・発送された文書のことで、2種類に分かれます。1つは転出が発生した村において作成される文書で、「人別送状」や「人別送証文」、「村送手形」などと呼ばれます。もう1つは転入を受けた村において作成されるもので、「人別請取状」「人別引取証文」などと呼ばれます。

人別送状と人別請取状はおおむね同じ構成で作成されています。主に、①移動する人物の名前や年齢といった基本情報、②移動の理由、③宗門人別改帳の加除の取扱い、④文書作成年、が書かれ、作成者は名主や組頭といった村役人層、宛先は主に相手村の名主になる場合がほとんどです。

人別送状と人別請取状は珍しいものではなく、各村落において一般的に作成されていたため、現在も多くの史料が全国に残されています。そのため、歴史地理学・歴史人口学の分野においては宗門人別改帳などと並び人の移動の根拠として用いられています。

井関村の人別証拠

関川文書には井関村の人別証拠が残り、石岡市史下巻においてこれらを用いた近世井関村における通婚圏の復元が試みられています。近年石岡市では関川文書の保存処理を進めており、史料の状態確認と合わせて内容の再調査を実施しました。

再調査にて確認された井関村の人別証拠は468通に上ります。最も古いものは寛政8年（1796）、最も新しいものは慶応3年（1867）が確認でき、近世後期を通じた井関村における人の移動が復元できます。

今回は468通の人別証拠を①転入・転出件数、②移動理由、③転入先・転出元、の3点で分類し、近世後期における井関村の様相や周辺地域との関係性を考察しました。

まず転入と転出のそれぞれの数については、井関村への転入が260通280名、井関村からの転出が208通218名で、転入が転出を上回っていました。年ごとの変動をみると、転入が10件以上となる比較的多い年は、10件の天保8年（1837）、12件の弘化3年（1846）、17件の慶応元年（1865）の3年にとどまり、総じて大幅な変化は認められません。一方、転出で10件以上の移動があった年をみてみると、文政5年（1822）に11件、文政9年（1826）に17件、文政10年（1827）に16件、天保11年（1840）に32件、弘化3年に15件、文久3年（1863）に10件が確認でき、転入と比較して激しく動く傾向があります。特に転出件数が多くなる時期として、文政9年から10年と天保11年の二期があります。これらの時期の井関村の様相を探ると、いずれも直前期に大規模な天候不順などが発生しています。以上のことから、近世後期の井関村においては、外部からの人の流入は一定の規模で維持され、全体では人口増加の方向に進むものの、天候不順等により大きな被害が発生した場合は緊急的に村外へ人を放出していたことがわかります。

次に人別証拠から判明する移動の発生理由を整理してみます。転入・転出ともに最も多い理由は結婚であり、次点が養子縁組となっていました。結婚と養子縁組が占める割合は、転入が約90%、転出が約88%であり、移動が発生する理由のほとんどはこの2つであったことがわか

ります。結婚と養子縁組の件数を比較してみると、転入は結婚が195件に対して養子縁組は38件と5倍ほどの差があります。転出は結婚が108件に対して養子縁組も75件あり、転入に比べると差が小さくなっています。養子縁組は、養子を出す側の家では人員整理による適切な経営規模への調整が主な目的として考えられ、対して受け入れる側は家を維持するための後継を得ることや人員増による経営拡大につながります。養子として入る件数は少なく、出る件数が多いという井関村の場合は、大規模な農家経営は難しく、農家の余剰人員を積極的に外部に出すことで、それぞれの家の経営を維持していたものと考えられます。

最後に、井関村に入ってくる人々はどこからやってきたのか、出ていった人々はどこへ向かったのか、その特徴をみてみます。井関村への転入件数が多い村を順にみると、最多は宍倉村の24件、次いで三村が15件、3位は石川村と安食村が12件となっています。次に転出件数をみると、最多は安食村の19件、次いで宍倉村の14件、3位は石川村と三村、高崎村が10件で並びます。近世村落の通婚は4里圏内で行われることが多く、特に1里圏内の件数が多くなる傾向が下野国河内郡町田村の事例などで指摘されていますが、井関村においても同様の傾向がみられます。一方で、距離の遠近と人の移動の件数が比例しない場合も確認されました。井関村から1里圏内に位置する村に高浜村がありますが、井関村への転入は2件、井関村からの転出は1件のみと明らかに少なくなっています。近世の高浜村は府中藩や笠間藩などの年貢米輸送を担った主要河岸として知られ、近隣村落の物資輸送に大きな影響をもった村です。しかしながら、関川文書に残る「井関村御城米船積帳」などの年貢米輸送関連史料をみると、井関村の年貢米輸送は石川村や安食村、下玉里村、佐原村の舟によって主に担われており、高浜村による関与は限定的であったことがわかります。こうした村同士の関係性の希薄から井関村と高浜村の間での人の移動は少なくなっているものと思われる。

また、転入元と転出先を調べると、近世について抱かれているイメージの正誤の確認もできます。近世の地域区分として「藩」の存在は広く認識されています。明治30年に刊行された『茨城県町村沿革誌』の関川村の項には「西は三村に隣し其距離稍近しと雖も旧藩時代に於て各々領地を異にし人情風俗渾て異に随て住民の交流も亦親密ならず」とあり、藩が異なる村との交流は少ないと

されています。しかしながら、実際の人の移動の件数をみると、三村からの転入は全体で2位、三村への転出は3位と比較的多かったことがわかります。近世後期の三村は府中松平藩、旗本の水野氏、同じく旗本の深尾氏の3者によって分割して所領されており、いずれも水戸藩領の井関村とは支配が異なります。こうした事例から、藩の違いが近世の井関村の人々の移動に与えた影響は小さいといえます。

以上のように、人別証拠を整理することで当時の村の状況や、周辺地域との関係性を推定することができます。同様の史料は現在でも石岡市内の各所に残るものと想定されますので、それらが発見・整理されることによって石岡市の近世がさらに詳細に復元されることが今後期待されます。

参考文献

- 五島敏芳 2002「宗門人別送状の成立-引越事例の検討を中心に-」『史料館研究紀要』第33号
- 中村治兵衛 1948「近畿農村の通婚圏」『農業総合研究』第2巻第2号
- 溝口常俊 1978「甲州における近世の通婚圏」『歴史地理学会報』第95号
- 川口洋 1984「近世非領国地域の通婚圏について」『歴史地理学』第124号
- 川口洋 1988「近畿地方における遠方婚について-17~19世紀-」『歴史地理学』第140号
- 高橋基泰 2018「旧上田藩上塩尻村における通婚圏の形成-清水助五郎家文書送り状の分析-」『研究年報経済学』第78巻第1号
- 石岡市 1983『石岡市史 中巻Ⅰ』
- 石岡市 1983『石岡市史 中巻Ⅱ』
- 石岡市 1985『石岡市史 下巻』

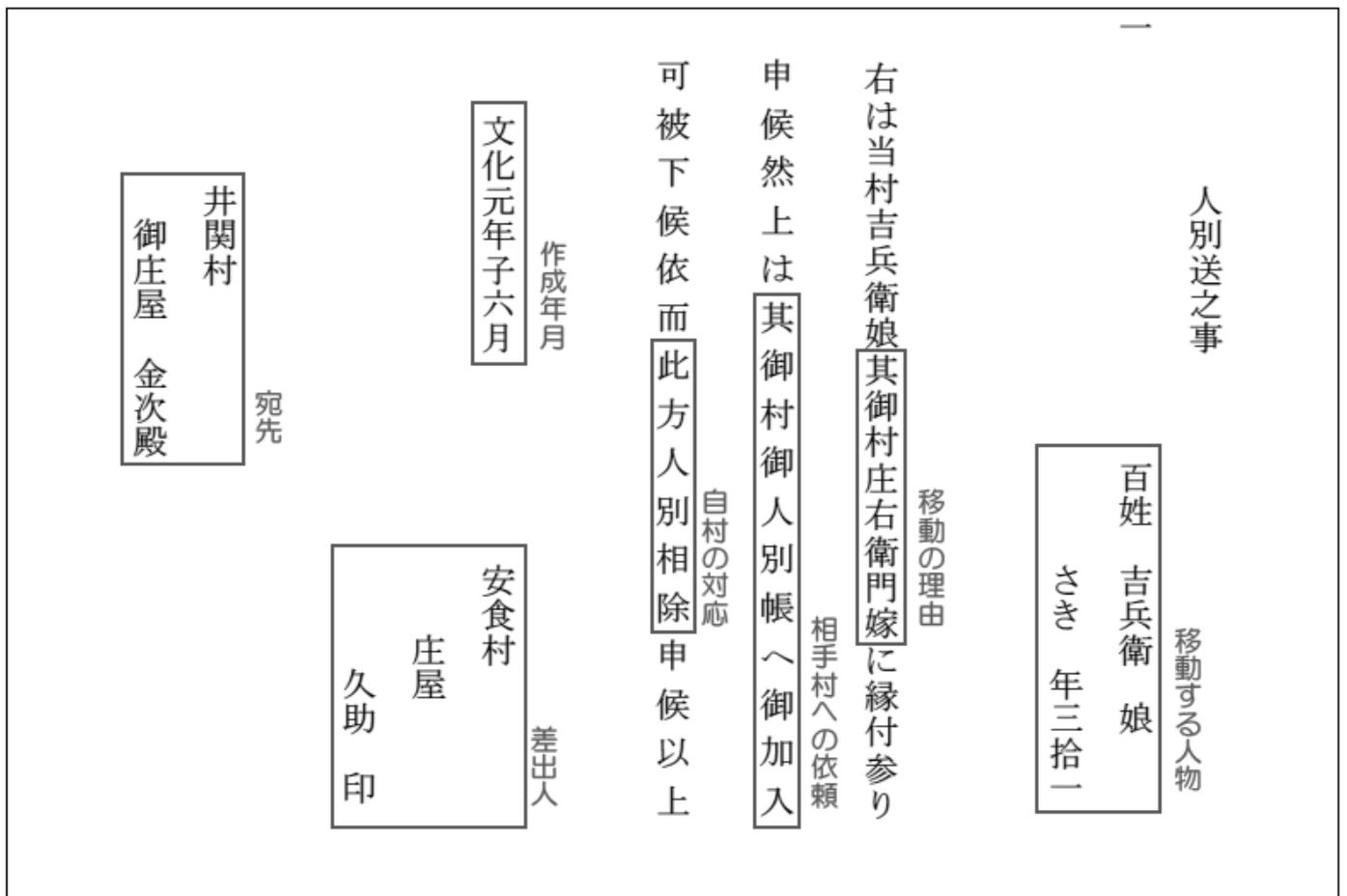
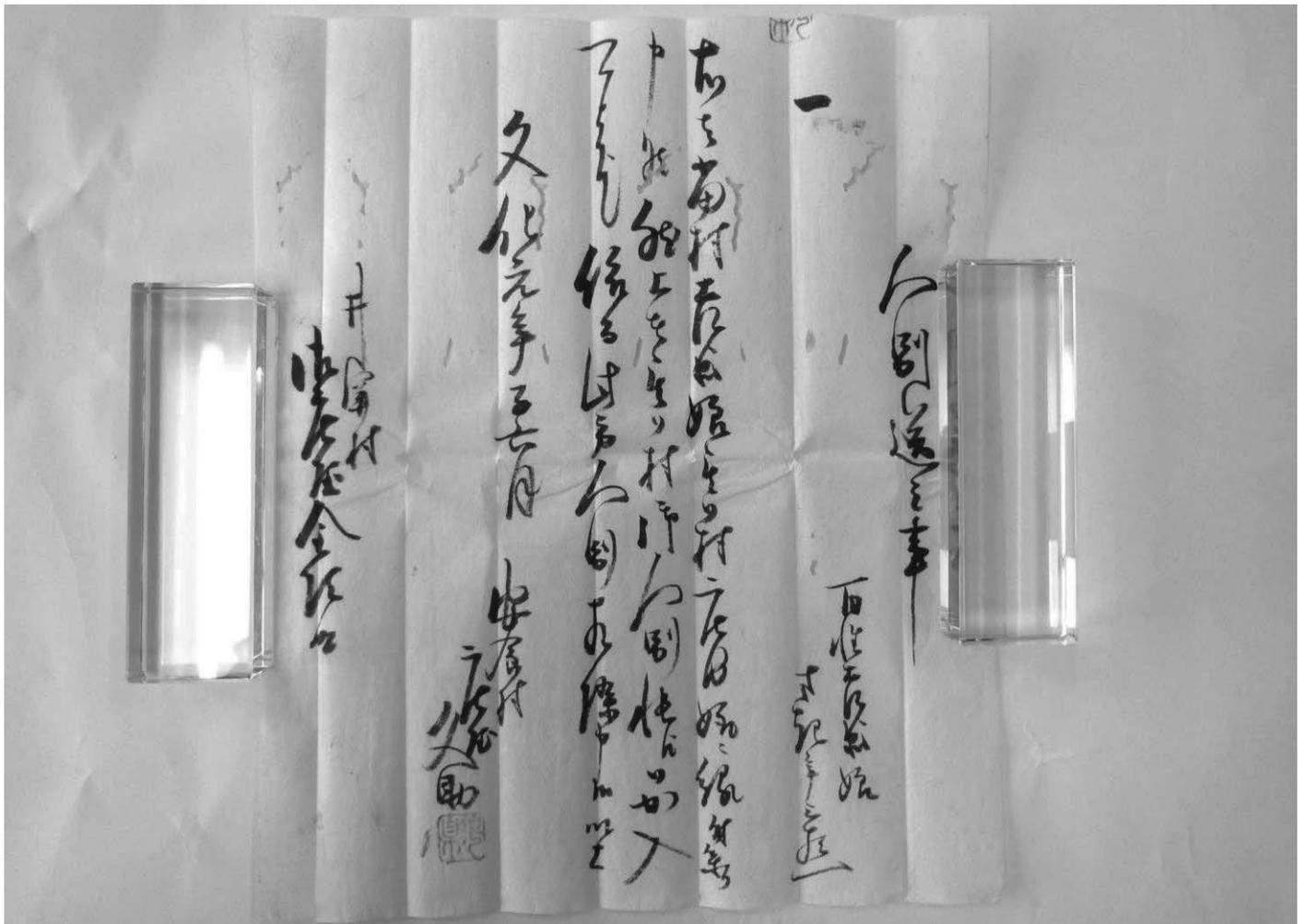


図1 人別送状内容解説

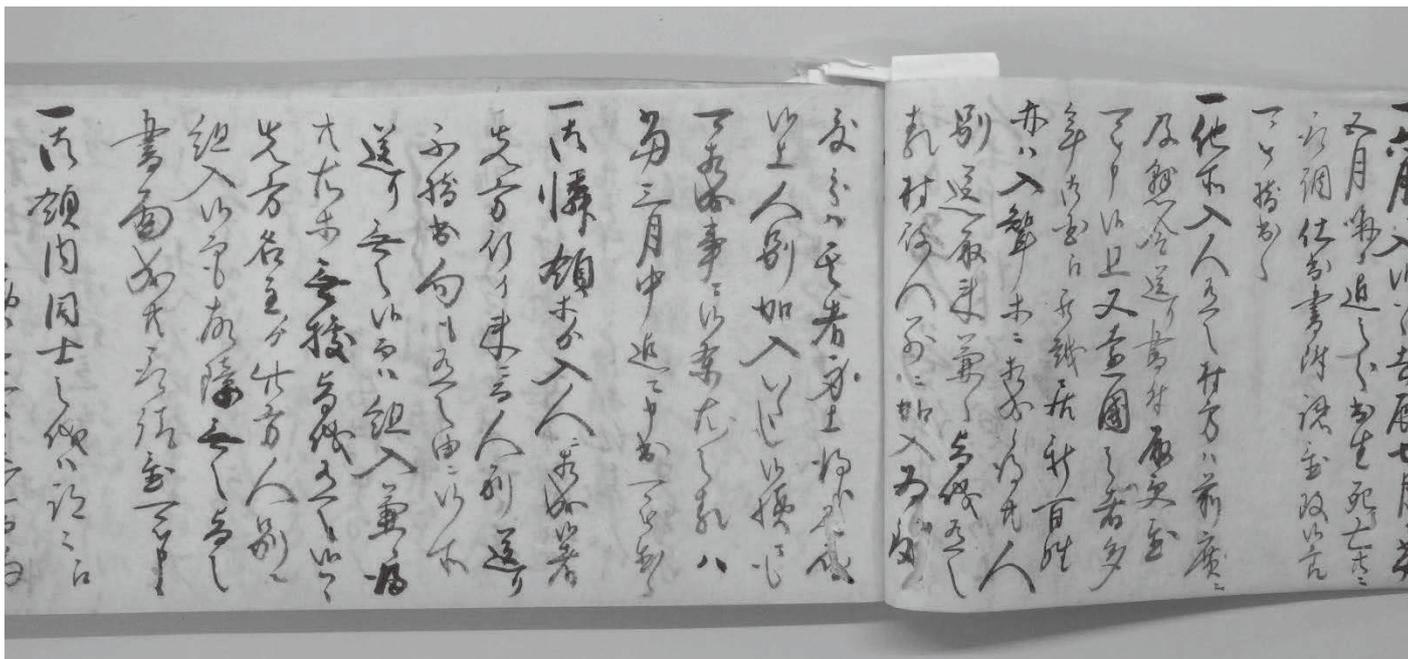


图2 文政5年(1822) 井関村御用留帳 人別改めに関する通知

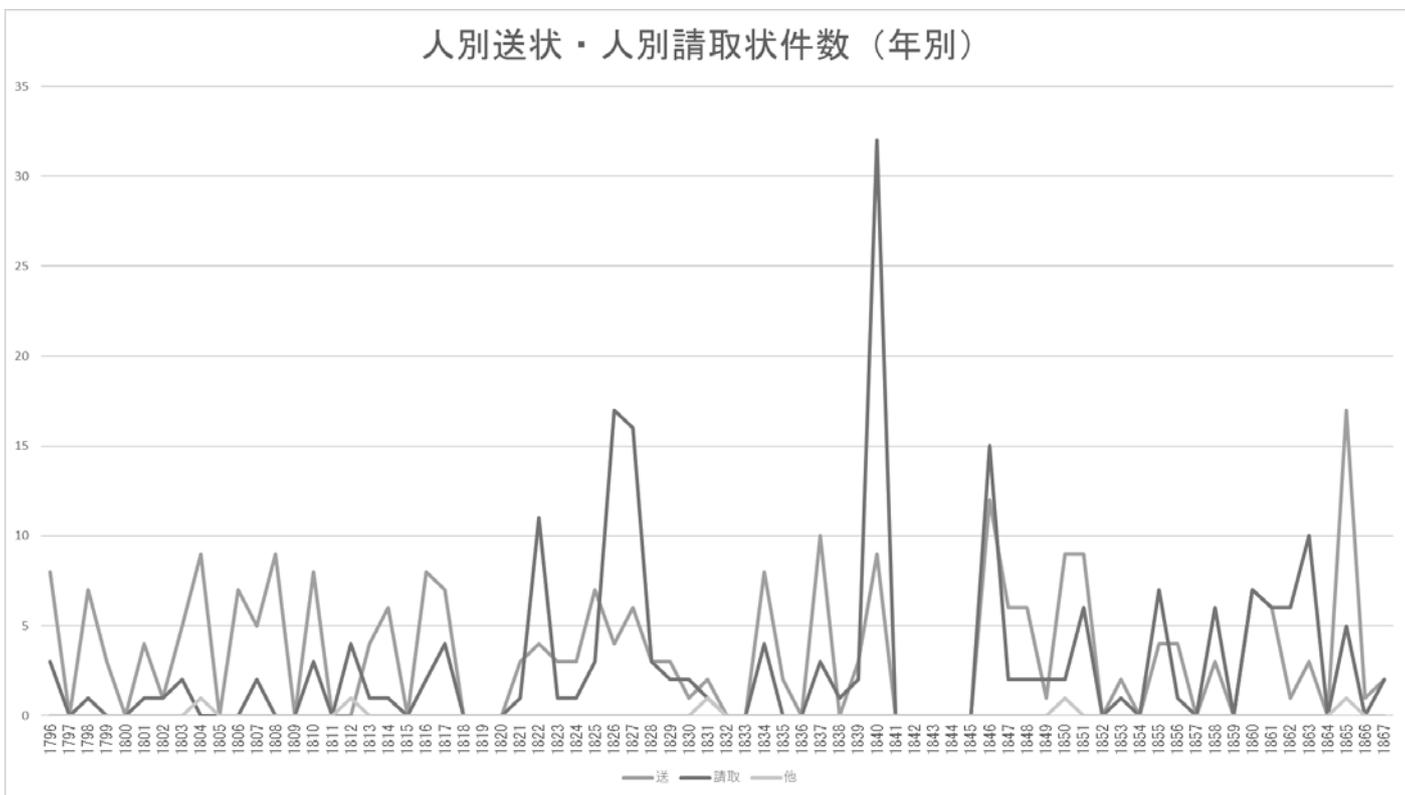


图3 井関村 人別送状・人別請取状件数（年別）

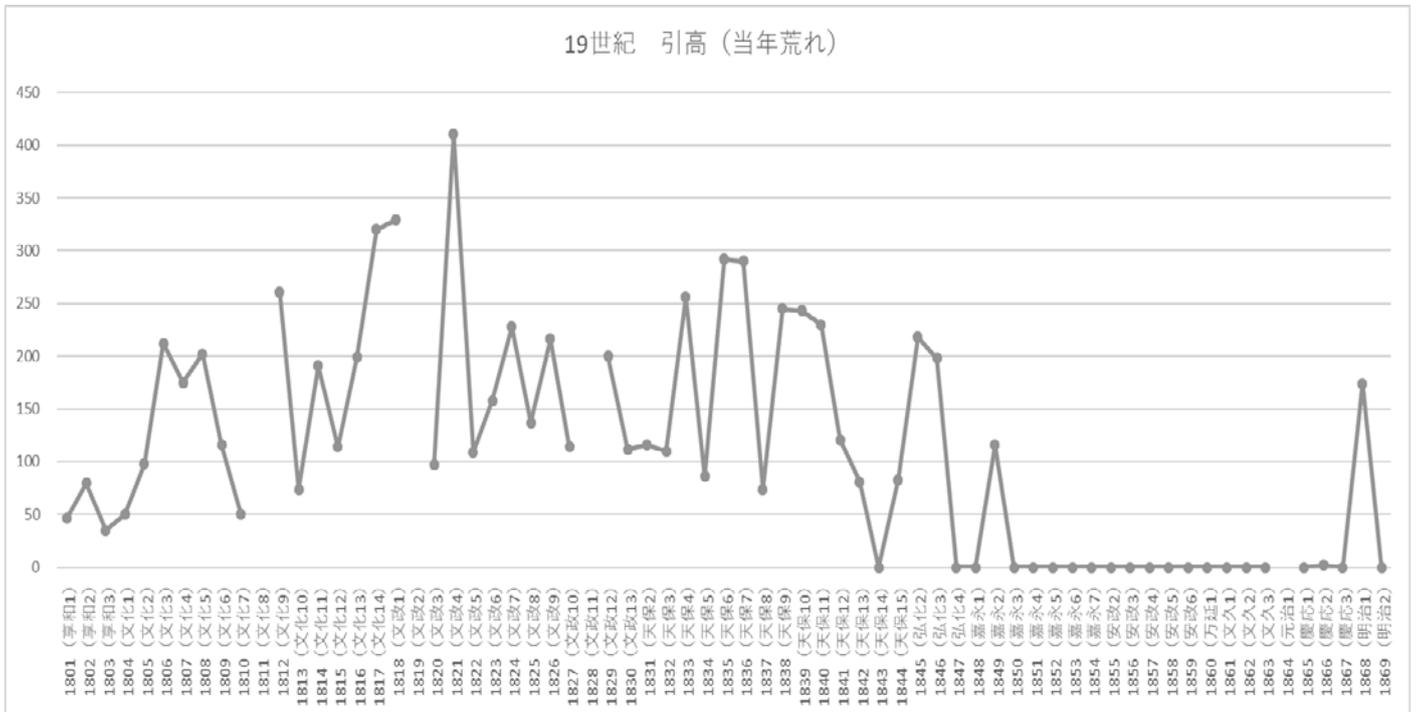


図4 井関村 19世紀年貢引高



図5 井関村支配金貸出帳厚さ比較 左から文化5年(1808)、文政8年(1825)、天保7年(1836)

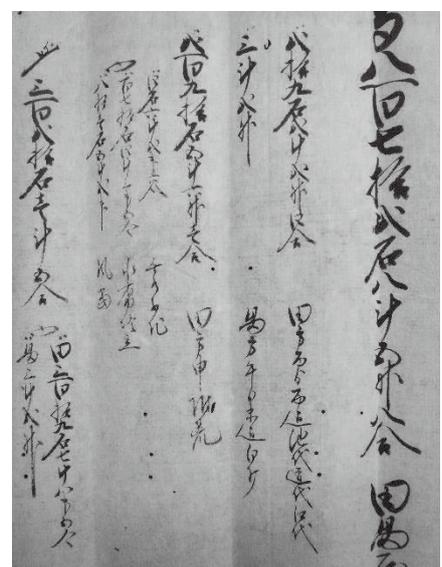
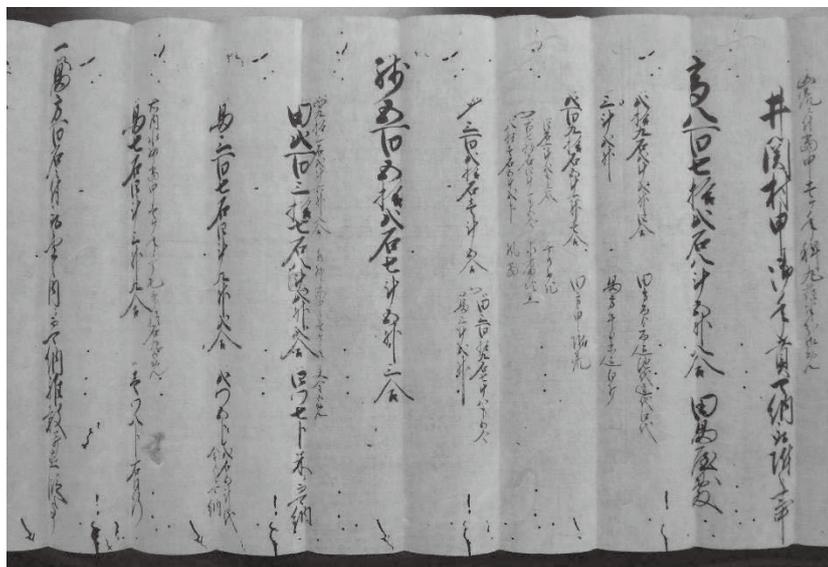
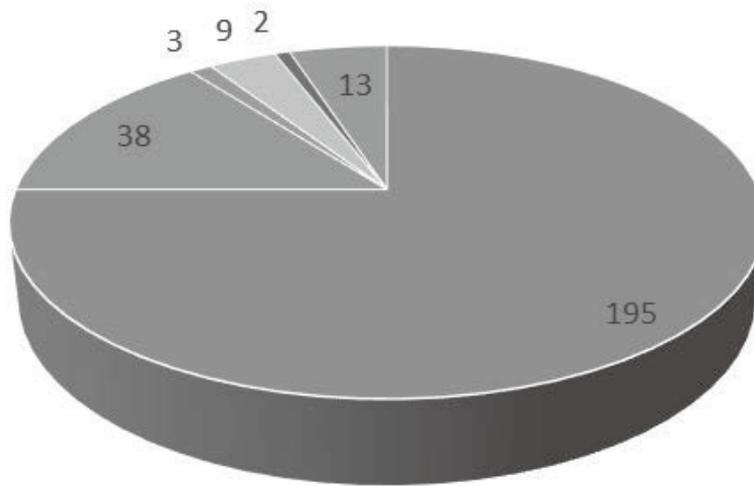


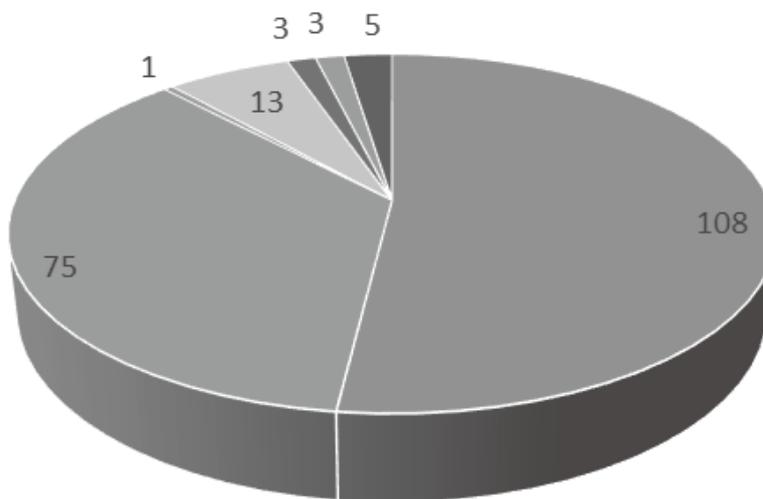
図6 井関村天保7年(1836)年貢割付状

井関村への転入理由



■ 結婚 ■ 養子縁組 ■ 引越し ■ 離縁 ■ その他 ■ 不明

井関村からの転出理由



■ 結婚 ■ 養子縁組 ■ 引越し ■ 離縁 ■ その他 ■ 帳外れ ■ 不明

図7 転入・転出理由別件数

石岡歴史年表

時代	年	日本の主なできごと	石岡の主なできごと
旧石器時代		・採集や狩りで生活する ・石器などがつくられる	・旧石器など 【下ノ宮遺跡・宮平遺跡・半田原遺跡・二子塚遺跡など】
		・土器や石器、弓などを採集や狩りなどで生活をする	・縄文土器や住居跡、貝塚など 【三村地蔵窪貝塚・東大橋原遺跡・白久台遺跡・宮平遺跡など】
弥生時代	200	・米作りが日本各地に広まる	・弥生土器や住居跡など
	300	・卑弥呼が魏に使いを送る（239）	【餓鬼塚遺跡・外山遺跡・宮平遺跡・新池台遺跡など】
古墳時代	400	・大和朝廷の全国統一	・初期の古墳が造られる【二子塚遺跡・丸山古墳など】
	500	・前方後円墳が全国に広がる	・大型古墳が造られる【舟塚山古墳・府中愛宕山古墳など】 ・各地に古墳群や埴輪が作られる【西町古墳・丸山4号墳など】
飛鳥時代	600	・聖徳太子が摂政になる（593） ・大化の改新（645）	・常陸国が誕生し、石岡地方は茨城郡となる ・常陸国を治める役所国衙が石岡に置かれる【常陸国府跡】 ・茨城郡を治める役所郡衙が茨城に置かれる【茨城廃寺跡】
	700		
奈良時代		・平城京（奈良）遷都（710） ・古事記、日本書紀、万葉集ができる ・東大寺の大仏開眼式（752） ・蝦夷征討（東北地方の平定）	・常陸国風土記がこの頃完成する ・国分寺・国分尼寺の建設が始まる 【常陸国分寺・国分尼寺跡、瓦塚窯跡】 ・蝦夷征討の基地となる【鹿の子遺跡・漆紙文書】
平安時代	800	・平安京（京都）遷都（794）	・常陸國總社宮などの神社、西光院などの寺がこの頃できる
	900	・武士団が各地に生まれる	
	1000	・平将門の乱が起こる（935）	・平将門が、常陸国府を焼き国印などを奪う（939）
	1100	・藤原道長が摂政となる（1016） ・平清盛が太政大臣になる（1167）	・源頼朝が、常陸国府に来て佐竹氏を攻める（1180）
鎌倉時代	1200	・源頼朝が征夷大將軍となる （1192）	・馬場（大掾）資幹、府中の地頭を認められる（1214） ・浄土真宗開祖親鸞が、石岡地方にも来訪する
	1300	・鎌倉幕府が滅びる（1333）	・北朝方の佐竹氏が石岡城に迫る 国府原合戦（1337）
室町時代		・足利尊氏が征夷大將軍となる （1338）	・大掾高幹、北朝方に転じる（1338） ・大掾詮国が旧国衙の地に府中城を築く（1346）
	1400	・応仁の乱が起こる（1467）	
	1500	〔戦国時代〕	・太田資正（三楽斎）、片野城に入る（1564）
安土桃山時代		・織田信長が室町幕府を滅ぼす （1573） ・豊臣秀吉が全国を統一する（1590） ・関ヶ原の戦い（1600）	・大掾清幹が佐竹氏に攻められ、大掾氏滅亡する（1590） 〔石岡地方は佐竹氏の完全な支配となる〕 ・石岡地方にも検地が行われ、茨城郡から新治郡になる （1594）
	1600		
江戸時代		・徳川家康が征夷大將軍となる （1603）	・六郷政乗が府中へ移る（1602） ・片野城に滝川雄利が入る（1603） ・皆川広照が府中へ移る（1623） ・一里塚が主要街道に設けられる
	1700	・鎖国が完成する（1641） ・各地で新田の開発が行われる	・徳川光圀の弟松平頼隆が府中松平藩主となる（1700） ・府中平村（現在の石岡の中心部）大火（1728）
	1800	・国学や蘭学が盛んになる ・江戸を中心に町人の文化が栄える	・高浜・石川に河岸問屋組合が結成される（1782） ・陣屋門が建てられる（1828） ・改革組合村柿岡五十三か村組合が成立する（1829）

江戸時代		<ul style="list-style-type: none"> ・ベリーが浦賀に来る（1853） ・安政の大獄・桜田門外の変（1860） ・徳川慶喜が大政奉還をする（1867） 	<ul style="list-style-type: none"> ・都々一坊扇歌，府中平村にて亡くなる（1852） ・佐久良東雄，桜田門外の変に連座して捕まり，獄で食を断ち亡くなる（1860） ・天狗党事件，染谷や府中宿が焼打ちされる（1864）
明治時代	1900	<ul style="list-style-type: none"> ・明治維新，江戸を東京とする（1868） ・廃藩置県（1871） ・学制が公布される（1872） ・大日本帝国憲法が公布される（1889） ・日清戦争（1894～1895） ・日露戦争（1904～1905） 	<ul style="list-style-type: none"> ・府中藩が石岡藩と名前を変え，府中平村も石岡と名前を変える（1869） ・石岡地方は，新治県となる（1871） ・茨城，新治の両県を合併し，茨城県となる（1875） ・石岡醤油醸造組合が設立される（1886） ・石岡・高浜・柿岡町，関川・三村・園部・瓦会・林・恋瀬・葦穂・小幡・小桜村が誕生する（1889） ・この頃，各地に尋常小学校や高等小学校ができる ・石岡書籍館が創設される（1889） ・明治天皇，陸軍大演習のため，園部村に行幸（1890） ・石岡駅・高浜駅完成（1895） ・真家信太郎，野菜促成栽培の試作に着手（1901） ・常陸國總社宮まつり年番制度確立（1902） ・国分寺から出火150戸焼失，仁王門など焼失（1908）
大正時代		<ul style="list-style-type: none"> ・韓国併合（1910） ・関東大震災が起こる（1923） ・普通選挙法公布（1925） 	<ul style="list-style-type: none"> ・新治郡立農学校（現石岡一高）創立（1910） ・石岡に電灯がともる（1911） ・町立石岡実科高等女学校（現石岡二高）創立（1911） ・柿岡に地磁気観測所設置（1913） ・羽成卯兵衛，八木干拓工事に着手（1920） ・町立石岡図書館となる（1923）
昭和時代		<ul style="list-style-type: none"> ・満州事変（1931） ・日中戦争（1937～1945） ・太平洋戦争（1941～1945） ・日本国憲法が公布される（1946） ・義務教育が六三制となる（1947） ・サンフランシスコ平和条約（1951） ・東海道新幹線開通（1964） ・東京オリンピック（1964） ・札幌冬季オリンピック（1972） ・沖縄日本に復帰する（1972） ・日中平和友好条約（1978） ・つくば科学万博（1985） 	<ul style="list-style-type: none"> ・石岡町大火，中町より出火約600戸全焼（1929） ・鹿島参宮鉄道全線（石岡～鉾田）開通（1929） ・半ノ木に大日本飛行協会の中央滑空訓練所建設開始（1940） ・小学校・中学校の開校（1947） ・高浜町，石岡町に編入（1953） ・石岡市誕生(2月)，三村・関川村編入(12月)（1954） ・山根1町7村が合併し，八郷町誕生（1955） ・県立八郷高校創立（1963） ・県立石岡商業高校創立（1964） ・市民会館完成（1968） ・柏原工業団地完成（1972） ・茨城国体開催，バドミントン会場（1974） ・市立図書館完成（1980） ・常磐自動車道石岡まで開通，八郷町中央公民館完成（1982） ・茨城県フラワーパーク開園（1985）
平成時代	2000	<ul style="list-style-type: none"> ・阪神・淡路大震災（1995） ・長野冬季オリンピック（1998） ・サッカーワールドカップ韓国と共同開催（2002） ・東日本大震災（2011） 	<ul style="list-style-type: none"> ・八郷温泉ゆりの郷オープン（2000） ・石岡市と八郷町が対等合併し，新石岡市が誕生（2005） ・鹿島鉄道廃止（2007） ・東日本大震災で被害を受ける（2011） ・朝日トンネル開通（2012）

『ふるさと学習—石岡を学ぶ—』（平成28年4月発行）より一部改変

第8回 石岡市文化財調査報告会
発表要旨

2025（令和7）年2月1日発行

編集 石岡市教育委員会 文化振興課

発行 石岡市教育委員会

〒315-0195 茨城県石岡市柿岡 5680-1

印刷 共和印刷株式会社

〒315-0001 茨城県石岡市石岡 2747-68
